

文化財あんない

平成12年(2000)

再改訂版



松前町教育委員会

発刊によせて

義農の里といわれるわが松前町は、西を美しい瀬戸の海に抱かれ、古くから人々が定住し、優れた文化が栄えてまいりました。現存する数々の歴史的文化遺産は、私たちの大きな誇りであり、祖先の生活の累積であるとともに、私たち町民の心の拠りどころでもあります。

この歴史と伝統の町に生きる私たちが、祖先の残した足跡を訪ね、郷土の生い立ちとその発展の過程を知り、新しい粧いをこらして永く後世へと継承していくことは、町民としての責務かと思えます。

しかしながら、2,000年を迎え、来る21世紀においては、ますます変化する生活環境や都市基盤の整備が進む中で、その自然や貴重な文化財が減少したり、経済優先の意識の陰で、なおざりにされてきたことは否めません。

幾多の時代を変遷し、その時々の人々の生活の痕跡を今にとどめる文化財は、私たちの町の歴史・文化を理解するとともに、将来の文化発展の基盤をなすものであります。

この「文化財あんない」は、文化財の保存・研究はもとより、町民の皆様には、ふるさと松前の再発見の案内板であり、訪れる人には、松前町をより深く認識していただく案内板でありたいと考えます。今後より一層、この「文化財あんない」のご活用を、祈念してやみません。

最後になりましたが、再編集にあたりご尽力いただきました、文化財保護審議会委員の方々、並びに各関係者の方々に心から感謝申し上げ、寄せる言葉とします。

平成12年3月

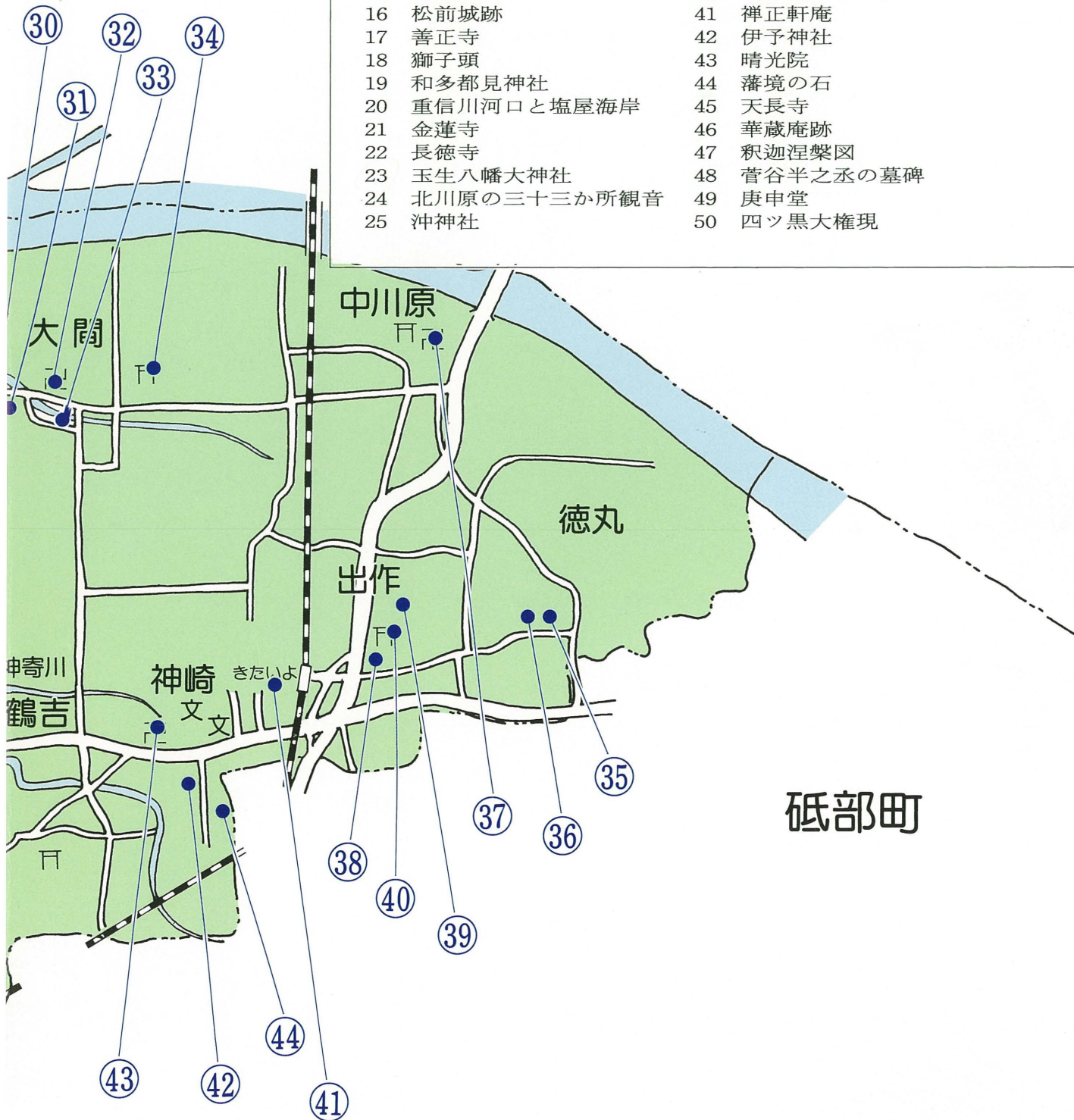
松前町教育委員会教育長 西村 温一郎

文化財位置図



文化財一覽表

- | | |
|----------------|---------------------|
| 1 鷺野南村塾「橙黄園」 | 26 稻荷神社 |
| 2 天神社（朝日天神社） | 27 薬師堂 |
| 3 貴布祢神社 | 28 玉生地蔵 |
| 4 宗通寺 | 29 頭王神社 |
| 5 延命地蔵尊 | 30 墨水学校跡と荒神堂（子育て地蔵） |
| 6 御用櫃 | 31 五松庵跡 |
| 7 妙寛寺 | 32 教深寺 |
| 8 松前港と天保山 | 33 くみじ |
| 9 住吉神社 | 34 素鷺神社 |
| 10 雨乞い踊り | 35 高忍日売神社 |
| 11 大念寺 | 36 本性寺 |
| 12 蛭子神社 | 37 宗金寺 |
| 13 義農作兵衛の墓 | 38 吉祥寺 |
| 14 矢野地蔵と筒井門の礎石 | 39 出作遺跡 |
| 15 大智院 | 40 恵依弥二名神社 |
| 16 松前城跡 | 41 禅正軒庵 |
| 17 善正寺 | 42 伊予神社 |
| 18 獅子頭 | 43 晴光院 |
| 19 和多都見神社 | 44 藩境の石 |
| 20 重信川河口と塩屋海岸 | 45 天長寺 |
| 21 金蓮寺 | 46 華蔵庵跡 |
| 22 長徳寺 | 47 釈迦涅槃図 |
| 23 玉生八幡大神社 | 48 菅谷半之丞の墓碑 |
| 24 北川原の三十三か所観音 | 49 庚申堂 |
| 25 沖神社 | 50 四ツ黒大権現 |



わしのなんそんじゆく とうこうえん
鷺野南村塾 「橙黄園」

所在地 大字 南黒田



南村塾跡

鷺野^{あきたろう}落太郎（南村）は、文化2年（1805）7月25日、南黒田村庄屋の長男として生まれた。幼時より好学心強く、博学強記、秀才のほまれが高かった。

郡中（伊予市）の沖莊^{そう}助、宮内桂山に師事したが、後、大阪に出て篠崎^{しょうちく}小竹の梅花社に入った。

以来、京阪の儒者と親交を結び、切磋^{せつさ}勉励^{べんれい}、学徳大いに進み梅花社塾頭に挙げられ、更に小竹の養嗣子となって、塾の経営を懇望されたが、父病弱のため帰郷し、庄屋職をついだ。

幕末動乱期の困難な庄屋職に精励しつつ、書齋を「雪月楼」と名づけ、京阪版元より直接万卷の書籍を購入して、読書・作詩に没頭し、また、漢学私塾「橙黄園」を開設して青少年の教育に尽した。橙黄園の教育内容は、きわめて高かったが、南村の学殖と人格を慕って入門者が相つぎ、伊予郡内最高の私塾と称賛された。

好学の士は競^{きそ}って南村を訪ね、郡内各地の庄屋の子弟はほとんど南村の薫陶^{くんとう}を受けた。

南村は率先自ら範を示し職務に励み、学問に精出し、孜々^{しし}として教えてやまぬ南村の人格に化せられて、幾多の人材が輩出した。

南村の交友は広く、中央・地方を問わず橙黄園を訪ね、あるいは書簡を送って教えを請う者は多かつた。頼山陽一家とは特に親しく、山陽は「日本外史」の初稿本を直ちに南村に贈っている。

多忙をきわめる南村の心に慰めを与える人は、竹馬の友、郡中の陶惟貞^{すえいてい}であった。惟貞は、膨大な著書の中に、数多くの南村の漢詩を掲載している。

明治10年（1877）7月7日、72歳で没したが、橙黄園教育が地方学問及び、教育に寄与した役割はきわめて大きい。

明治34年（1901）門弟ら相集い、頌徳碑^{しょうとくひ}を郡中五色浜^{こんりゆう}に建立した。



日本外史（頼山陽）

てんじんじゃ 天神社（朝日天神社）

所在地 大字 南黒田



天慶5年(942)9月25日、伊予国司参位河野伊予守安家が自国内に25社(6社とも)を太宰府天満宮より勧請し、道真ゆかりの地に奉斎した「天神社」の一社で、「学問の神」としてその神徳を慕い崇敬してきた神社である。

菅原道真(845~903)

天神社の拝殿は、従三位参議文章博士菅原是善(812~880)の第三子、字は「三」、幼名は「阿呼」、後世人呼んで「菅公」と尊称した。幼少より文才拔群、和歌を詠み、詩作に励んだ。

その後、兵部少輔・民部少輔・式部少輔を歴任し、元慶元年(877)には、文章博士を兼任した。同7年(883)勃海大使の歓待には、応酬の詩を作り文名大いにあがった。仁和2年(886)讃岐守、帰京後、権大納言に進み右近衛大将、中宮権大夫を兼務、醍醐天皇の代には右大臣となり、左大臣藤原時平に次ぐ高官となり、中国の国状を察して恒例の遣唐使派遣を中止する等功績大であったが、時平らの策略により太宰権師に左遷された。出発にあたり、住み慣れた紅梅殿を後にして「こち吹かばにほいおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」と詠んだ。家族ごとく分散、別地への厳しい配流であった。延喜3年(903)2月25日太宰府浄妙院で没した。享年58歳。

道真の学問は儒学、信仰は仏教(天台宗)、深く観音を念じていた。書は弘法大師、小野道風とともに「筆道の三聖」と称せられた。また「天穂積命」「菅穂積命」として京都北野天満宮、福岡県太宰府天満宮に奉斎せられ、天神様と崇められ全国一万五百社に祀られている。

境内社には、淡島神社・稲荷神社・八重垣神社・庚申社・杵築神社が祀られている。

平成3年(1991)拝殿の屋根の大改修を行った。



ソテツが繁る鳥居

きふねじんじゃ 貴布祢神社

所在地 大字 北黒田

松
前



社叢と玉垣の美しい貴布祢神社（南より）

当社は、第32代崇峻天皇の元年（587）8月23日、小千（越智）宿祢が勅を奉じ、越智の三島浦戸宮より、大山積神をこの地の一の宮として勧請したといわれ、また和銅5年（712）8月23日越智玉純が大三島宮より諸山積大明神（大山積神の別称）を勧請、別雷神、高竈神を合祀、創立したともいわれている。

神亀5年（728）9月には、山城国愛宕郡より貴船大明神（岡象女神）を勧請、ついで宝亀18年（787）8月23日には、三島宮より十六皇子神を勧請、弘仁9年（818）には国司小千（越智）真勝が水田を寄進し、社殿の結構を整え、別当を置き、郡司大領に命じて国司に代わり奉幣させ、社運は隆盛を極めた。

承平・天慶の乱（935～941）により荒廃したが、元暦元年（1184）神官高市武者所清儀、本殿を修復。文治3年（1187）高市太郎光儀社領を確定し、社殿を荘厳して社運を回復。元弘元年（1331）颶風出火、社殿ごとごとく焼失したが、貞和5年（1349）河野対馬守通治、社領百石寄進、更に河野通堯社領百石を加え、神馬飼育料大豆五十貫、白銀二千疋を毎年奉納、社運再び大いに開いた。

天正13年（1585）豊臣秀吉の四国平定の戦禍により社殿焼失、慶長5年（1600）松前城主加藤嘉明社殿を造営、社領百石寄進。以来、領主の崇敬と神官の誠意奉仕、住民の尊崇により、地域の文教・教育の中心となって現在にいたる。

境内に鷲野南村門の逸材、高市山城正盛房（1825～1906）の頌徳碑がある。盛房は神官として誠意奉仕し、また庶民のために私塾を開き、農家の子弟の教育につとめ「村に不学の徒なく咄嗟の声、郷に立つ」と、その教育をたたえられた。明治44年（1911）4月、門弟相集い頌徳碑を建立した。

（注：「よしあきら」ともいう）



手水鉢と燈籠

そうつうじ 宗通寺

所在地 大字 北黒田



宗通寺の山門

山号は南光山、院号は慈悲院という。真言宗智山派京都智積院の末寺で、本尊は十一面観世音菩薩である。

開山、縁起不明であるが、真光寺（戦国時代に戦乱により焼失、現在では古跡が貴布祢神社南方約50mの水田の畔に残っているのみ）の塔頭（脇寺）の一つ

であったといわれている。

寺宝には、涅槃画像・十六善神画像・日天月天画像・大般若経がある。また過去帳には、赤穂浪士菅谷半之丞（墓碑は大溝原田墓地にある）の法名が載せられ供養されており、菅谷半之丞ゆかりの寺である。

建造物では、本堂兼庫裡明治28年（1895）改築、山門明治18年（1885）建築、更に高市瑛氏が長女の菩提を弔うため、昭和50年（1975）寄進した鐘楼がある。

寺の行事としては、第二次世界大戦までは、息災延命と虫送りのため、百万遍数珠繰り、正月大般若祈祷が行われていた。現在は涅槃会（3月第2日曜）、地藏祭（地藏町延命地藏祭4月・8月24日）、日待祈祷（大溝原田組、1月下旬）等が行われている。

檀家は、北黒田・南黒田・大溝にある。



町内唯一の鐘楼

えんめいじ ぞうそん
延命地蔵尊

所在地 大字 北黒田

松
前



「地蔵町」の地名にかかわる延命地蔵尊

松前町北黒田県道筋にあり、宗通寺持ちである。開基^{かいき}については明らかでなかったが、平成11年雨漏りで本堂天井補修のとき、次のような由来を記した板が発見された。

当延命地蔵尊^{にんのう}は人皇第百拾六代^{ももぞのてんのう}桃園天皇の御代即今を去る百七拾年前^{みよ}宝暦8年（1758）3月時の松山城主松平^{ほうれき}隠岐守^{おきのかみ}様が信濃国善光寺より勸請せられ^{しなのくに}爾来代々藩主の信仰浅からず毎年正月及^{かんじょう}7月の各24日には必ず御家老職をして^{ごかるう}代参せしめられし由緒極めて深き御仏体^{ごぶつたい}なり当地が牛飼ヶ原と称せし頃より各地^{さいきやしょう}よりの賽客踵を継ぎて今日に至る地蔵^{じざう}町とは文政7年（1824）3月24日より呼^よ称さる

右由来未来郷土の後継者之為に誌茲

昭和2年（1927）4月

- 1、堂宇は、明治27年7月新築（一般寄付金）
- 1、昭和2年4月腐朽の為、開運講基本金にて再築をなす。
- 1、開運講は、大正12年3月設立す。

現在の堂宇は、昭和28年（1953）8月に再建されたものである。

扁額「延命地蔵尊」は、徳丸出身の加藤^{へんがく}精神大僧正の書である。境内の西北の隅に細長い四角の歌碑があり、和歌が二首刻まれている。寄進者は、怒和寅三郎氏、歌は田中桂山（初太郎）氏の作といわれている。また、信者から奉納された多数の御神酒徳利^{おみきとくり}（おみきすず）が吊されている。

一度は詣りて頼め地蔵尊

命の延る印立つな里

伐り残る松は牛飼ふ原と聞く

ほとけ祀りて町となりぬる



石の歌碑と御神酒徳利

ごろびつ 御用櫃

所在地 大字 北黒田567-7



三段重ねの「御用桶」

加藤^{よしあき}嘉明が、慶長6年（1601）松山城築城及び修理の時、松前のおたたさんは、「御本城御用、伊予郡濱^{はま}村」ののほりを先頭に総出で巨石を運び、また「御用櫃」に石や瓦を入れ、頭上に乗せ運搬した。

これらの奉仕によって、松山藩内行商の特権を認められた。行商するおたたさんには、藩から一定の鑑札^{かふ}が下付され、「御用櫃」、「御用桶」の焼印がしるされた。これを頭上に魚の行商をした。

のほりを桶の隅に差して行商した。という説もあるが明らかではない。

図にある三段重ねの「御用桶」は筒井の磯貝家所有のもので、松山興産松前給油所の事務室に陳列されているも

のである。

一番下には雑魚を、中の桶には鯛などの上物を、そして一番上には、匂いが移らないよう、ゆでしろこ、ちりめん、よなき貝等を入れていたという。

みょうかん じ 妙寛寺

所在地 大字 筒井（宗意原）

松
前



風雨に耐える武井宗意の墓石

山号は日進山、日蓮宗身延山久遠寺の直末寺で、本尊は、十界大曼荼羅である。

慶長8年（1603）松前城主加藤嘉明が松山に築城移転した時、当地にあった妙円寺を移転したので、嘉明の臣、武井宗五郎貞通（宗意）がその跡地に法華庵を造り、宗意庵と称したのが始まりといわれている。

武井宗五郎は、松前地区の有力な郷士で、嘉明が松前を領することになると随分と忠勤に励み、功績が多く、重視されたようである。嘉明から拝領の馬の鞍があったと寺伝にあるが、現在は不明である。

安政4年（1857）の大地震で本堂が壊滅し、取り除かれたが、明治3年（1870）妙円寺日寛上人が再興し、妙寛寺と名づけた。

明治30年（1897）頃、伊予市大平の天神堂を移して本堂とした。

昭和49年（1974）日蓮上人生誕750年祭記念事業として現本堂を新築した。その時、武井宗意の末裔、大本山法華経寺総長武井日進大僧正が遠祖の縁によって、その名を賜り、泰雲山を日進山に改めた。

なお、嘉永2年（1849）西高柳教願寺（明治初年妙寛寺に合併）より、清正公像（加藤清正の霊）を勧請した。この尊像は、霊験極めてあらたかで、度々の洪水にも流失を免れたと言われている。

境内には、武井宗意の墓碑があり、また、明治42年（1909）3月23日松前城跡開墾の時、発掘された塔の礎石と謂われる石がある。

武井宗意にちなんで、「宗意原・宗意箱」の地名が残っている。



発掘された礎石

まさきこう てんぼやま 松前港と天保山

所在地 大字 浜（新立）



天保山の瀧姫神社・厄除社

中世から近世にかけて、関西随一の良港といわれた松前港は、加藤嘉明^{よしあき}の命で、足立重信^{あだちしげのぶ}が軍港として、整備改修している。

慶長2年（1597）2月、嘉明はここから2400の兵を率いて朝鮮に出兵した。

江戸時代には、参勤交代の御座船^{ござぶね}の水主浦「大阪上げ米」^{かこのうら}の津出し港^{つだ}として賑わった。藩主から「漁業上の特権」を与えられて以来、松前浦衆たちは男は海へ、女は「おたた」行商に励み、勢力を誇ってきた。

明治以降は「からつ船」（通称「わいた船」）に儀助煮^{ぎすけに}・干魚、また砥部の陶磁器などを積み込んで、北海道から中国大陸まで行商した。港の対岸には、「問屋」が建ち並んで活況を呈した。

この天保山旧港の埠頭^{ふとう}は、砂州の上に、海底の土砂をさらい積み上げた丘で、黒松を植えつけ、港の目標となっていた。埠頭には、漁師の守護神として、南から瀧姫神社^{たきひめ}・厄除社^{やくよけ}・龍王社^{りゅうおう}の3社がある。

瀧姫神社に祀^{まつ}られているお瀧姫は3人の侍女とともに松前の浜に漂着し、生活のため、魚行商の道を求めたと信じられている。（50頁参照）

松前地区では、お瀧姫が「おたた」の祖であり、「おたき」が「おたた」に転訛^{てんか}したと堅く信じてきた。お瀧姫を神として祀り、行商の安全と繁栄を祈願してきた。

天保山は藩政時代から続いた「御面雨乞い」^{おめん}道中（川内町雨滝さんまで）の出発地点である。神社前での御用桶を頭上に舞う「おたた雨乞い踊り」は有名であった。

すみよしじんじゃ 住吉神社

所在地 大字 浜（新立）

松
前



住吉神社拝殿

住吉神社の主祭神は、和田積神^{わ だつみのかみ}、素盞鳴神^{す さのおのかみ}であり、境内には、金刀比羅神社の末社に、天地創造の神大己貴命^{おおなむちのみこと まつ}を祀っている。

神功皇后三韓より凱旋の時、住吉神のお告げにより、藤の枝を9本海中に流し、その漂着地に住吉明神^{ほうさい}を奉斎したといわれている。

住吉神社は、往古より、海上の安全守護の神として漁民を守り、豊漁を授け、沃土の開発と、療養健康保持・家内安全、幸福を守る神として尊崇奉斎^{そんすう}されてきている。神社の宝物には、具足一領、奉納獅子舞の獅子頭があり、獅子頭は明治6年（1873）の作品で、近隣では最も古い秀作品である。境内には、松前商人が「からつ船」で砥部焼を販売したことへの感謝として、砥部焼窯元全員が寄進した寄付芳名碑がある。

また春秋の祭には人出も多く、特に秋祭における若者たちの神輿^{みこし}の宮出し宮入りは、勇壮で近郊では有名である。



砥部焼窯元が寄進した寄付芳名碑

あまご 雨乞い踊り

所在地 大字 新立・本村

松前地区の雨乞いは、^{さんろう}参籠・踊りも行われたであろうが、^{かんぼつ}大旱魃には、水神に汚れたもの、嫌いなものをかけ、怒らせ、あばれて雨を降らせてもらう方法がとられた。いわゆる「御面雨乞い」行事である。

御面雨乞いは、藩政時代、代官行事として、現重信町の野田・牛渕の両三嶋宮（^{とくい}徳威三嶋宮・^{うきしま}浮嶋神社）と松前町浜との間で、神面の^{とぎよ}渡御とおたたさんの雨瀧三嶋宮参拝の儀式が行われた。

「御面雨乞い」の古面は、野田・牛渕の両三嶋宮に隔年^{せんぶ}遷府する掟となっている。

大旱魃になると、三嶋宮では2夜3日の祭典を行い、宮司は潔斎して切火を用い、降雨を祈り、4日目の辰の刻（午前8時）神面を奉じて松前に向かうのである。

松前の浜に着くと「御面」を仮宮に安置し、潮水を汲んで再び2夜3日の祭祀を行う。最後の6日目には松前のおたたさんも加わり、「御本城御用」の赤絹ののぼりを先頭に、「面」と松前の海で汲んだ「潮水」を奉持して河之内雨瀧三嶋宮へ向かうのである。

雨瀧に着くと、「御面映」の行事を厳修し、翌、午前12時すべての行事が終了する。

おたたさんにとって往復約58Kmの道を直射日光を浴びながら、^{みの}蓑を着け、潮水をいただき、「雨をたもれ」と唱えながら身振りをつけて歩くのは容易ではない。

御面は、^{すいこ}推古天皇21年（613）8月15日、^{おちのますみ}乎智益躬が大^{ぶがく}三島大明神を祈願し、舞楽を奉納した時、海上に小船が出現、^{しら}儉べてみたところ舟中に人なく、3個の古面が置かれていた。益躬は奉納舞楽の場と随喜し、^{うじょうみょうごう}宇城名郷久米部王^{おうだてみょうごう}楯明宮に奉仕した。後、兵火を避けて河之内山中^{うつ}に遷し、さらに雨瀧三嶋宮に遷し、享保17年（1732）5

月、寺社奉行の命により、野田・牛渕両三嶋宮に隔年遷府するようになった由緒深い古面である。



「おたた」姿



雨乞い御面

だいねんじ 大念寺

所在地 大字 浜（本村）



大念寺本堂

山号は潮音山、院号は実相院。浄土宗鎮西派、京都智恩院系の山越村不退寺の末寺で、本尊は阿弥陀如来である。天保13年（1842）2月京都の仏師山本茂助作と伝えられている。

正保4年（1647）皆蓮社眞誉上人開基といわれ、その後、数世を経て寺門大いに衰退

したが、元文年間（1736～1740）法蓮社海誉上人が再興し、延享年間（1744～1747）中興、空蓮社暁誉上人が寺門の興隆をはかり、寛政11年（1799）本堂を再建し、更に、天保13年（1842）3月には本堂を改築した。

明治23年（1890）には、庫裡を改築し、本堂は昭和27年（1952）再建された。

本寺には、長命大師が祀られている。もと松前町本村の本通りにあったが、明治42年（1909）大師堂がとりこわされ、大念寺に仮安置され、後に信者によって、大念寺境内に長命大師堂が建設された。

境内には、玉井千蘿の句碑がある。

寺の主な行事としては、春秋の彼岸会・施餓鬼会・宗祖降誕記念法会等がある。壇家は、浜・宗意原を中心に約600戸ある。



長命大師堂

えびす じんじゃ 蛭子神社

松
前

所在地大字浜（本村）



「まさき」の地名にかかわる戎子神社の神名石

主祭神は事代主神、配神は
蛭子神・和多積神・鈿女命で、本
殿は神明造瓦葺(約1m²)である。

昔、事代主神が海辺に現れ、「待
ち居る先に来る者に幸を与えよ
う」とお告げになった。それ以来、
この地を待先と称したが、後の世
に正木、また松前と改められたと
言われ、今の「松前」の地名の起
源といわれている。

事代主神は大国主神の御子で、
ともに出雲国を治めていたが、
「国譲り」に際し、高皇座靈尊
(古事記では天照大神)の御神託
を受けて、天下った武甕槌神・
経津主神と三穂の碕で会い、国土
献上を父神に進言し、海中に八重
の蒼紫垣を造り、天の逆手を拍っ
ておかくれになった神である。

古語で「事代」とは、神がかりになって、天上の諸神の神託(言)を受けて現世の「事」(行動)を左右決定する意で、事代主神はその役目を司る主神である。

配神「和多積神」は海洋を主宰し、航海を守護する神で、後に全国の海人を統率するようになる。「阿曇連」氏の祖神である。

「鈿女命」は天岩戸神話・天孫降臨神話にご神徳を現された神で、後に朝廷の祭祀鎮魂の儀式等に舞楽を奉仕する「猿女君」の祖神である。

神功皇后の三韓出陣に際し、航海の安全を祈願して、蛭子神を奉斎したという。寛喜年間(1229~1231)には、蛭子菩薩と称したこともあった。

慶長年間(1596~1614)松前城主加藤嘉明が社殿を再建した。更に、安政年間(1854~1859)再建され、村落鎮守・海上安全、そして漁労の神としても深く崇敬され現在に至っている。

ぎのうさくべえ はか 義農作兵衛の墓 (昭和23年 県史跡指定)

所在地 大字 筒井

松
前



石碑「義農之墓」裏面に丹波成美撰の碑文がある

作兵衛は元禄元年（1688）2月10日、筒井村の貧農の一人子として生まれた。貧しかったが生まれつき勤勉で、農業に精を出し、作兵衛が壮年の頃には3反3畝（約3300m²）の自作地と、1反5畝（約1500m²）の小作地を耕作する筒井村の模範的な百姓となった。

享保17年（1732）恐るべき大飢饉が到来した。3か月を越す長雨とウンカの異常発生で、被害は西日本に集中したが、松山藩が甚だしく、中でも、旧松前地区の損害が特に甚大であった。餓死者は800人に及んだ。

作兵衛の父や長男も相ついで餓死した。その頃、家には1斗（18ℓ）の麦種が残されていた。人々は食

べるように勧めたが、「農は国の基、種子は農の本、自分の命より尊い」と人々を諭し、従容として餓死した。（享保17年9月23日）

作兵衛の死はいたく人々を感動させた。安永5年（1776）時の松山藩主松平定静は、丹波成美に命じて、作兵衛の事績を永久に伝えるため、碑文を撰ばせた。碑の建立には、伊予郡24か村から360余人が労力を奉仕し、安永6年（1777）4月15日完成した。

高さ2m余りの雲母安山岩の碑には「義農之墓」とあり、裏には丹波成美撰の碑文がある。

明治14年（1881）尊崇の念が高まり、神号を「瑞穂建功命」として義農神に祭祀され、また明治40年（1907）筒井の八幡社に合祀、昭和22年（1947）には護国神社に合祀された。

昭和32年（1957）9月23日義農神社の上棟式が挙行された。さらに義農公園も整備され、松前町民の憩いの場ともなっている。

毎年4月23日を義農祭として、盛大な供養が行われている。

やのじぞう つついもん そせき
矢野地蔵と筒井門の礎石 (昭和44年 町史跡指定)

所在地 大字 筒井



矢野地蔵堂

関ヶ原の戦いで戦功のあった松前城主加藤嘉明が、勝山（松山市内）に城を築く時、松前城の石材・櫓・筒井門の解体されたものが利用された。

松前城筒井門の解体は、家臣矢野某が指揮をしていたが、門の棟木をつり降ろしている時、綱が切れて矢野某の頭に落ち、棟木の下敷きになり圧死した。

以後、夜間筒井門跡を通行する者は、必ず「だれか」と大喝されて病となるので、村人から恐れられ、時の大智院住職順諦和尚が大いに憂い、慶長11年（1606）に残された筒井門跡の礎石の上に、矢野某を供養するため地蔵尊を安置し、大施餓鬼を営んだ。それ以来怪事はなくなり、村人は安心した。

筒井門の礎石の一つは、矢野地蔵のやや東の町道にある。

礎石は花こう岩の自然石で、上面は平たく、ほぼ円形をしており、直径約1m余りある。



松前城門柱礎石

だい ち いん 大智院

所在地 大字 筒井

松
前



後藤又兵衛夫妻の供養五輪塔

大智院は山号を
円鏡山、寺号を
能仁寺と称し、開
山は慶長5年(1600)
松前城主加藤嘉明
の命を受けて順諦
大和尚が建立を計
画し、慶長10年
(1605)開山した。
64年を経て火災
にあったが、天和
2年(1682)諦誉
和尚が再建し、寛
政8年(1796)體

誉和尚が再度再建した。

天保3年(1832)には長誉和尚が山門を改築した。

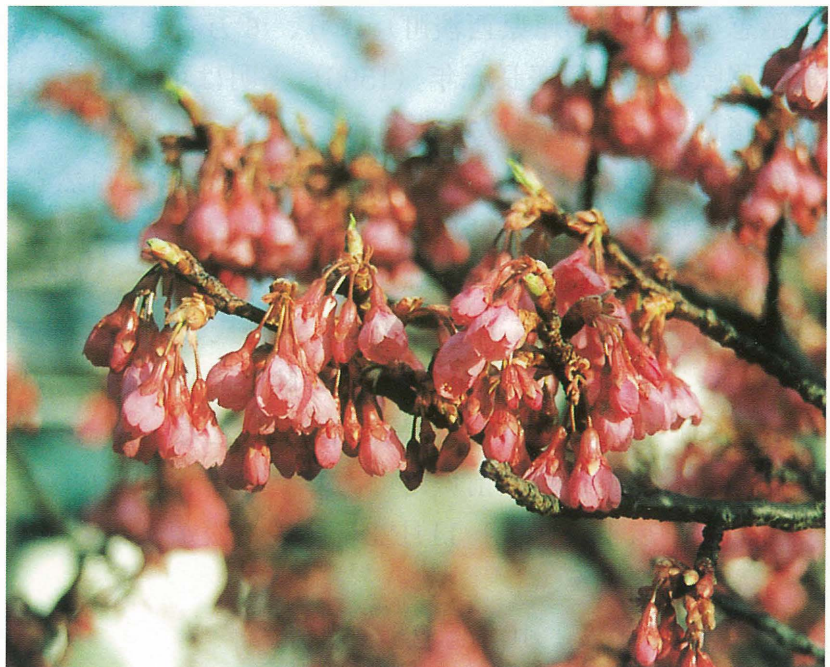
現在の本堂は、昭和28年(1953)12月31日に再建された。

本尊は阿弥陀如来である。

寺宝には、靈巖和尚(知恩院第32世)自筆の「一枚起請文」・明治2年(1896)宗門帳がある。

境内には、毎年旧暦正月16日頃に咲く「雪勝の桜」(日清の役の大本營に一枝を送ったところ、日本軍が連戦連勝したことから、この名に改められた)がある。

また後藤又兵衛夫妻の供養五輪塔のほか、俳人野沢喜久三郎、教育者赤星大龍の碑、及び水利土木建設に力を注いだ西谷広助の頌徳碑がある。



雪勝桜

まさきじょうし
松前城址 (昭和44年 町史跡指定)

(表紙写真)

所在地 大字 筒井



松前城礎石

松前城の起源は明らかでないが、平安時代初期すでにこの地に定善寺（性尋寺）（今の金蓮寺）があり、軍事交通の要衝として、境内に砦が設けられたのが始まりであろうといわれている。

松前城の文字が初めて文献に現れるのは、建武3年（1336）祝安親軍忠状である。大山積神社文書によると、南北朝時代、南朝方合田弥四郎貞遠のたてこもる松前城を北朝方の祝彦三郎安親が攻略したとある。天正16年（1588）栗野木工頭秀用が松前城主となったが、豊臣秀次事件に連座除封された。文禄4年（1595）加藤嘉明が淡路志智城（現兵庫県西淡町）より、6万石をもって松前城に入り、金蓮寺を現在地に移転した。翌慶長元年（1596）嘉明は足立重信らに命じ、伊予川（現重信川）を改修して、松前港の大拡張を行った。

松前城の規模は明確ではないが、地の利を得た自然の要害堅固の城だった。

慶長2年（1597）には嘉明は松前城を根拠地として、2400余名の兵を率いて朝鮮に出兵した。慶長5年（1600）関ヶ原の戦いに、嘉明は東軍に従って出征したが、留守に毛利勢3000が三津港に上陸、河野氏の残党と松前城をうかがったが、佃十成らの勇戦により撃退した。関ヶ原の戦いの功により20万石となった嘉明は、慶長8年（1603）松山城に移り、松前城は廃城となった。天保以降二の丸を耕地化し、余り土を盛った所が現松前城跡である。明治42年（1909）耕地整理により、様相は一変し、大正11年（1922）11月23日龍燈の松が大風で倒壊して、松前城を偲ぶものがなくなった。

大正14年（1925）10月記念碑を建てた。

ぜんしょうじ 善正寺

所在地 大字 筒井

松
前



開基仏（部分拡大）

善正寺の山号は松光山と称し、開山は天正4年（1576）、宗祖親鸞聖人11世の法孫顕如の法弟子の開基である。

本尊は阿弥陀如来で、寛文11年（1671）当時第2世順知和尚の時、総本山京都西本願寺より下附されたものといわれている。

本堂は明治41年（1908）4月再建され、山門は寛文年間（1661～1672）に左甚五郎の弟子の作と伝えられている。

境内には、明和5年（1768）「矢野騒動」で不慮の死をとげた、松山藩士竹村紋太夫の供養碑がある。

寺宝には、阿弥陀如来絵像・親鸞聖人絵像・聖徳太子絵像・七高僧（龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空）絵像・親鸞聖人御真筆と伝えられる「不断煩惱得涅槃」の一行物がある。

また当寺の過去帳には、伊予絣の創始者鎌谷カナ・伊予市三秋の開拓者で鉄砲の名手、畑ノ左衛門の位牌がある（位牌には、元禄七甲戌歳八月十六日没俗名佐右衛門とある）。



畑ノ左衛門の位牌

し しがしら
獅子頭

松
前

岡
田

所在地 大字 塩屋・新立



塩屋の獅子頭

塩屋地区保管の獅子頭は、幅28cm、奥行30cm、面高24cmのくりぬき作りで、ずっしり重みもあり、作も立派なものである。

作者や製作年月日は不明であるが、獅子入れ木箱に、大工 中村清次郎、

明治22年（1889）9月 伊豫郡北川原原村、若連中

世話人 土井貞治 両川豊治 嘉村吉五郎 岡本重太郎 戒田鶴五郎

宮崎勝五郎 戒森市太郎 戒田忠太郎 嘉村豊太郎 戒田燕之丞

しめてじゅうにん

拾人の箱書きがある。

このことからして、明治22年以前の作であることは確かである。新立地区保管の獅子頭は、明治6年（1873）作とあるから、町内でも最古のものと思われ、貴重なものである。



新立の獅子頭

わたつみじんじゃ 和多都見神社

所在地 大字 北川原（塩屋）



新築された和多都見神社本殿

稲荷神社の境外末社である。
祭神は底筒男命・中筒男命・
上筒男命すなわち、住吉の神を
祀る。

文政3年（1820）3月22日に北川原村塩屋組戒田甚平の先祖が撰津の住吉大社より勧請し、潮水を防ぐための祈願をした。

明治4年（1871）廃社になったが、明治16年（1883）再興し、更に平成3年（1991）改築された。

境内には、北側に金毘羅さんが、南側には庚申さんがある。この両社の祭り日は金毘羅さんが毎月9日、庚申さんは庚申の日である。

庚申さんは現地の北西に遙拝所

があったのを、耕地整理の時ここに移したらしい。庚申さんは幸福に導くという庚申信仰があるという。

両社の祭り日には、「乙夜」という行事が行われていて、参拝に来た人に子供（中学生）がきなこむすびをあげている。

金毘羅社の東側に大きな「オムロ」がある。これは海霊山である。昔、現在のつるさき食品西側空地にあったのを、昭和20年代に現在地に移したものである。

海から来た霊を祀ったので海霊山と呼ぶようになったと伝えられる。

人々が参拝するようになり、豊漁豊作が続き、社付近に露店ができたほどであったという。

境内には大正4年（1915）12月に建てた耕地整理の碑がある。



格調高い海霊山のオムロ

しげのぶがわ か こう しお や かいが ん
重信川河口と塩屋海岸

所在地 大字 北川原(塩屋)



重信川河口大橋

わずかな^{ひがた えん}干潟と塩^{しようち}沼地の植生からなる重信川河口は、松前町に残された貴重な自然環境の一部である。たて網の漁場(イナ・ボラ)として、娯楽とタンパク質源を近隣の住民に与え続けていた生産力豊かな環境であった。

堤防とそれに続く海岸砂丘は、クロマツの美林におおわれ、潮風や飛砂から田畑や塩屋集落を保護する役目を果たしていた。

新川海水浴場のようにクロマツは夏の日射しをさえぎり、魚つき保安林、再生可能な燃料資源の重責をも果たしていた。クロマツの砂防林は南へと続き新川まで達していた。しかし、現在はすべて人工物の護岸で、^{せきじつ}昔日の面影はなくなった。

重信川河口には、ハマサジ・ナガミノオニシバ・ウラギクなど塩沼地植物の代表種が生き残っている。また、ゴカイやカニ類がいて、餌を求める野鳥が多数集まってくる。シラスウナギの捕獲や、イナ・ボラ・チヌ・ハゼなどがおり、また、水ぬるむ頃の潮干狩など多様な活用がなされている。

野鳥観察の有力な候補地の一つでもある。冬季のオナガガモ・ヒドリガモ・マガモなどカモ類が豊富である。

春秋の渡りにはシギやチドリ類が多く、野鳥の国際空港となる。夏には、コアジサシなどと、四季おりおりの野鳥を観察できるバードウォッチングの適地でもある。



重信川河口

こんれん じ 金蓮寺

所在地 大字 西古泉



伊予十二薬師第9番 金蓮寺本堂

古くは性尋寺（定善寺）といった。真言宗智山派京都智積院の末寺で、本尊は海上出現の薬師如来（秘仏）である。

大同3年（808）河野氏によって開創され、天安元年（857）宗祖弘法大師の法孫明実が入って寺の基礎が確立された。

貞観元年（859）には、玉生八幡大神社の大別当に任ぜられた。貞応元年（1222）中国の僧明海が渡来し、寛喜3年（1231）中興開基して性尋寺と号した。同年、後堀河天皇のご病氣の時、弘法大師自筆の千手観音を修法したところ、たちまち病氣が全快せられたので、以来、天皇のご祈願道場となった。上記千手観音のことは、天皇の勅命を伝える（口宣）写しが玉生八幡大神社の「寺院取調書」に記されている。

文禄4年（1595）加藤嘉明は松前城築城のため、金蓮寺を当地に移した。

この地方では、大変な出来ごとがある時、「大事金蓮寺」という習慣がある。

このことは、金蓮寺由緒書に「太平記にいわゆる大森彦七猿樂をしていろいろ怪事あり、楠木正成・源義経等の亡霊が出たというのはこの寺である。」とある。（太平記巻第23に「大森彦七が事」とある。）

一般には矢取川伝説としてよく知られている。

義農作兵衛の菩提寺であり、過去帳に記載され、供養している。

本堂は、昭和50年（1975）に再建された。現在南が正面であるが、元は東向きであったという。



明海上人の祈願道場の碑

ちょうとくじ 長徳寺

所在地 大字 西古泉



ねのひ、ねのこく 子聖大権現堂

この権現は古代インドの大黒天で、元禄年間(1688~1703)長徳寺の第4世吟龍和尚が播磨の国(現兵庫県)から勧請し、以来、寺門清寧・五穀豊饒・悪疫平癒の鎮守として尊崇されている。大黒天は厨房の神で、一般に「ねのひさま」と尊崇され、甲子の日を祭り日としている。子の年の子の日子の刻生れの難病の子どもが、子の日子の刻に全治したと語り伝えられており、腰の病に靈験があるとして遠路より来る者多く、各地に「ねのひみち」の道標が立つに至った。

境内墓地に、明和6年(1769)「矢野騒動」の責任を一身に負い刑死した七右衛門(伊予の三義人の一人)を祀る墓碑・供養地藏尊がある。

浄土宗鎮西派京都知恩院の直末寺で、本尊は、阿弥陀如来である。

文禄3年(1594)、念誉上人によって開基された。

江戸時代初期、西古泉に三好又兵衛という人がいたが、ある夕方法話を聞き、感ずるところがあって草庵を結び剃髪して仏に帰依していた。正保2年(1645)突然村を出、31年目の延宝4年(1676)に帰ってきた。

錦の袋に親鸞上人の袈裟の一部を持っていて、本尊としてあがめていた。そのことを藩当局が知り、堂宇を建てたといわれている。

境内に権現堂があり、烏帽子袈裟の子聖大権現を祀っている。



「ねのひみち」道標 松前町神崎

たもうはちまんだいじんじゃ 玉生八幡大神社

所在地 大字 西古泉

岡
田



天の傾きを支える変形 手水鉢

主祭神は、^{ほんだ}譽田
^{わけのみこと}別命、^{さん}配神は、三
^{じょお}女大姫神・^{あしなか}足仲
^{ひこのみこと}彦命・^{おきながたらしひめの}氣長足姫
^{みこと}命・^{たもういしのかみ}玉生石神である。

「玉生八幡宮御鎮座伝記」によると、^{じんぐう}神功皇后が三
^{かん}韓におもむかれる時、立ち寄られ、感応するところあ

って神に誓い、戦勝を占い白布を浸したところ濃紺に染まった。それで吉兆と祝され、「^{こいぞめ}濃染の里」と詔された。(地名：古泉の起源)と考えられる。

帰途、松前の沖に船を止められ、^{あまつかみ}天神の託宣によって、^{たくせん}久斯美玉(靈妙な尊い玉)を伊予市上野の大木の下に納められた。この地を^{たもうばやし}玉生林といった。

後、この地方の^{ぐんじ}郡司が社殿造営→岡田に^{こんりゅう}神殿建立=久斯美玉宮と称した。慶雲4年(707) ^{いつくしま}巖島神社から^{さんめ}三女神^{がみかんじょう}勧請して^{ごうし}合祀一日女宮と称す。

貞観元年(859)宇佐八幡大神宮の神霊を上野玉生林に勧請。同2年(860)西古泉の日女宮に合祀→玉生八幡大神宮→玉生八幡大神社と改称。

当社の社殿は、はじめ南面していた。(南参道に鳥居があるのはその名残り)松前城主^{よしあき}加藤嘉明が慶長4年(1599)彼の祈願によって西向きに改築して^{うぶすな}産土大神として^{すうけい}崇敬した。

参道右側にある^{ちようず}手水鉢は、4匹の動物の上に乗った特異な構造になっている。その周囲には、全部の氏子の地区名が刻んである。文久2年(1862)の奉納である。

境内に「^{たごり}田許(田許里)」さまがある。^{せき}咳病・寝小便を治す神とあがめられている。「たごり」は咳の方言である。



民間信仰の田許さん

きたがわら さんじゅうさん しょかんのん
北川原の三十三か所観音

所在地 大字 北川原



22番観音（総持寺観音）

北川原の路地に面して、そこに石仏がある。これは、明治の末期、大西源蔵らが観音講をおこし、ご詠歌グループを結成していた。この講員らが、大正初期、西国三十三か所観音を勧請することを決め、今出の石工某に造ってもらった観音像を、講員の住宅近くに安置したものである。

現在ほと絶えているが、巡拝してご詠歌を奉納することが長く続いていたといわれる。

33あった観音（石仏）も散逸して、下図の場所にある16身を見るだけとなっている。

観世音菩薩を略して観音とい、法華経普門品に説く観音が

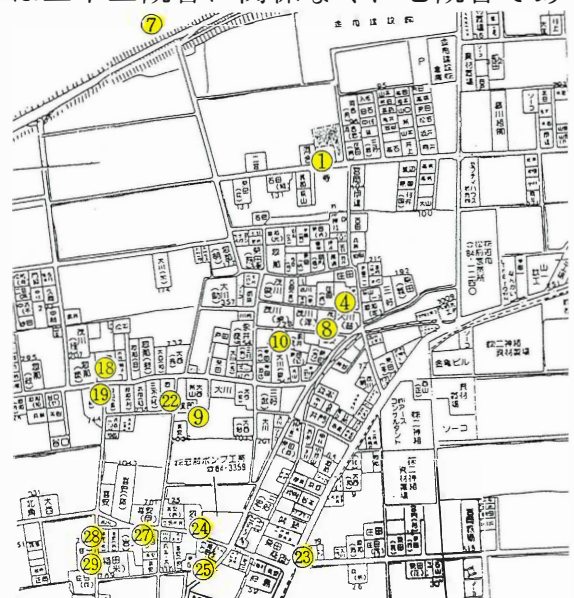
33の姿に変身して現われ、あら

ゆる災難から救うということに基づいて考えられた三十三観音である。

33か所巡礼もこの数によるが、札所の本尊は三十三観音に関係なく、七観音である。

七観音とは、聖観音・十一面観音・千手観音・不空罽索観音・馬頭観音・如意輪観音（天台系）真言系では准胝観音に、すべてを合わせたものである。

22番観音は、摂津三島郡三島村、総持寺の観音を勧請したもので、巡礼詠歌は『おしなべておいもわかきも総持寺の仏の誓たのまぬはなし』である。



現存する観音像安置場所

所在地 大字 北川原



沖神社の本殿

祭神は表筒男命・中筒男命・底筒男命である。この三神を総称して住吉神という。

応安8年(1375)北川原開発奉行であった重川武衛門は、海水が流入して農作物に被害を及ぼすのを防ぐため、小社を建立して住吉神を祀り潮どめを祈った。この小社を明神社と叫んだが、後に沖神社と改称した。

伝説によれば、この住吉神は沖より出現した神霊で、古来、疫病の回復に靈験のある神といわれる。

昭和の初めまでの沖神社は、本殿・拝殿・社務所などがあり、境内には大木が茂っていた。(拝殿に掲げられた四

十七士の絵馬は、現在、稲荷神社に移されて掲げられている。)

夏には、神社付近の老人達が、境内の木陰で涼をとり、ここが憩いの場、交流の場となっていた。また子供達も境内に集まって遊ぶことが多かった。

北川原の子供達には、1か月に1回「乙夜」という行事があった。それは、子供達の家から少しずつ米を集め、それを子供の家が月ごとの交替でおむすびをつくり沖神社に供える。その日の夕方、子供達は沖神社に集まり、国語の教科書を一人ずつ大声で朗読したあと、お供えしたおむすびをいただいて家に帰った。

毎年、5月8日には沖神社の例祭があり、「ごしゃまつり」といわれていた。「ごしゃ」の意味ははっきりしないが、明治41年(1908)に耕地整理が行われたとき、北川原に散在していた小さな五つの神社を沖神社に合祀したためであろうといわれている。祭りの当日は、大字の各地にのぼりが立てられ、子供の奉納相撲があり、見物客も多く集まった。また、北川原の多くの人々が参詣し、露店も立ち並びにぎやかな祭りであったという。

現在の沖神社は、大きな樹木もなく、本殿のみとなり、往時の盛況を偲ぶことはできないが、数本の大木の朽ちかけた切株にわずかな名残をとどめている。

なお、境内の一隅に妙見龍王白玉大神社の祠、愛宕社・庚甲社の古い石碑、明治43年(1910)の耕地整理記念の石碑が建てられている。

いなりじんじゃ ながれみや
稲荷神社 (流宮)

所在地 大字 西高柳



松並木の美しい参道

主祭神は、倉稻魂神、
 配神は、田中神・太田
 神・級長津彦神・級長
 戸辺神・稚産霊神・保
 食神・猿田彦神であ
 る。

境内社には、素鷲神
 社 (建速須佐之男命)・
 金刀比羅神社 (大己貴
 命・少彦名命)・桜木神
 社 (宇迦御魂命)・若宮
 神社 (大鷦鷯命)・素鷲

神社 (建速須佐之男命外一柱) がある。飛地境内社としては、和多都見神社 (住吉大神・塩屋鎮座) と沖神社 (住吉大神・北川原鎮座) がある。例祭は10月14日。

本殿は流造銅板葺 (24.75㎡) で、神紋は三つ玉である。

神亀5年 (728) 9月の鎮座と伝えられ、高柳明神と称したが、元暦元年 (1184) 8月、流宮五社大明神と改称し、享保5年 (1720) 稲荷大明神と改め、後に稲荷神社と改称した。

昔は社地八町四方に及び、その中に7池7森があったといわれる。

この神社の祭神は稲の神として祀られ、江戸時代には藩主から250石の社領寄進があり、五穀豊饒の祈願所として藩主または、奉行が御中屋敷まで出座して、祓川で禊祓いの後、奉幣の為にご参詣した。

松山藩内唯一の稲荷神社であるので、五穀の神として崇敬が厚かった。

宝物には甲冑・神鏡・棟札・狛犬・石像・古面・版木等があるといわれている。

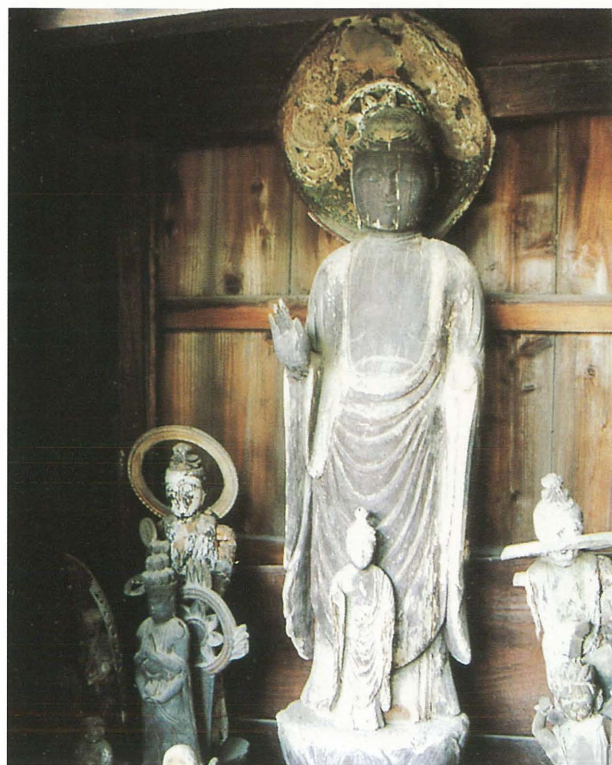
この神社には、長く美しい松並木の参道馬場が東西に走り、拝殿には、絵馬奉納額が多く、菅谷半之丞ら四十七士のものもある。



稲荷神社絵馬

やくしどう 薬師堂

所在地 大字 昌農内



東林寺の本尊だった薬師如来像

薬師堂 間口約2.06m 奥行約1.61m
屋根瓦葺^{ぶき}
薬師如来 高さ約1.20m 他に神像等
14体、六地藏 高さ44~63cmがある。

昌農内の共同墓地に入ると、すぐ右側に六地藏^{まつ}が祀られており、その奥に薬師堂が建立されている。

この堂の中には、光背^{こうはい}のある薬師仏と、小さい14体の神像が祀られている。この薬師如来は昔、玉生神社の東に建立されていた東林寺の本尊^{たもう}であったといわれている。その後、東林寺は昌農内本村（池内酒店のすぐ向い）に移されたが、昌農内の人々はその寺を、ただ「寺」と呼んでいたもので、新しい寺の名称は伝えられていない。

その寺は、明治20年頃から明治40年頃まで、岡田駐在所として、代々の巡査が使用していた。また、その寺の一室は、昌農内の集会所として、人々の協議に使用されたという。

この寺は、明治43年（1910）から始められた耕地整理の時にこわされ、寺の本尊は、寺にあった六地藏や墓地とともに、昌農内共同墓地（現在地）に移された。

耕地整理前には、六地藏には地蔵田3畝（約300m²）の村有田があり、それを耕作した人が、毎年7月17日に「十七夜」といって、おにぎりをつくり参詣者^{さんけい}を接待した。そして大人はむしろを敷いて念仏を唱えたという。

現在は毎年8月24日（盂蘭盆会^{うらぼんえ}）に、老人会の人々が薬師堂と六地藏を清め念仏を唱え、その後、小宴を催している。

今も線香の煙が絶えない。



薬師堂

たもうじぞう 玉生地蔵

所在地 大字 昌農内



享保大飢饉の供養 玉生地蔵

ほこら
祠 間口約91cm 奥行約91cm
屋根銅板葺^{ぶき}
地蔵 高さ約60cm
台石 約42×34cm 高さ約36cm
関谷邸の南西四つ辻に面した角に小さな祠があり、その中に一体の地蔵が安置されている。

この地蔵には「宝暦4年（1754）8月施主 玉尾村中^{たまうそんちゆう}」と刻まれており、また台石には「伝心霊^{でんしんれい}」とある。これは、松山藩の町人や農民の中から、4,780人余りの餓死者^{がし}を出したといわれる享保の大飢饉^{ききん}の時、亡くなった村民の霊を慰めるとともに、今後の村中の無病息災^{こんりゆう}を祈って、建立されたのであろうと考えられている。

昔、玉生地蔵は、玉生地区の四つ辻にあったが、明治43年（1910）

から始められた耕地整理の時に、他の祠や墓地とともに、昌農内共同墓地に移された。

ところが、約40年後の昭和23年（1948）に、現在の場所に祀^{まつ}られることになった。これには次のような事情があった。

関谷家では、昭和18年（1943）1月父親が病死し、続いて小学校2年生の弟が急病で亡くなった。一か月に2度の葬儀を出し、その後も次々病人が出、暗い生活が数年続いたという。思いあまった母親が、祈祷師^{きとうし}のもとを訪ねたところ、「お地蔵さんが、元の場所に帰りたいといっておられる。元の場所にお祀りしてあげては…」と告げられた。母親は直ちに、地蔵移転の許可をもらい、元の場所に近い現在地に移した。これ以後、関谷家には大きな災難は無くなったという。

毎年8月24日の地蔵会には、近所の人々や、老人会の人々が集まって念仏を唱え、その後で茶菓子を囲んで、歓談の会をもっている。

ず おうじんじゃ 頭王神社

所在地 大字 恵久美



頭王神社

主祭神 ^{かぐみ や ごろうのみたま} 頭王弥五郎 霊
配神 ^{たけはや すきのおのみこと} 建速素盞鳴命

平安時代の貞観年間（859～876）の頃、恵久美は玉生八幡神社の奉幣使であった頭王弥五郎の領地であった。弥五郎は領内の住民により政治をしたので、住民から大変敬われた。

奉幣とは、^{へいはく たてまつ}幣帛を奉るという意味で、古くは勅旨をもって山陵や神社に幣帛（神に奉獻する物）を奉った。その奉幣は神祇官によって^{わか}頒ち、これを使者に渡された。この使者を幣帛使といい、神社によって一定の姓氏にきまっていた。

天慶3年（940）、国司伊豫守源好古の命により、和田三郎兵衛通功が頭王弥五郎の霊を奉斎して、頭王大明神と称した。その後、明治になってから頭王神社と改称された。今の神社の地は、頭王弥五郎の館跡であったといわれている。

例祭は5月3日、氏子65戸、本殿は流造瓦葺（1m²）である。

大正の末から昭和の初め頃、例祭には相撲、芝居がおこなわれ、露店も多く立ち並んだ。氏子の家には、親戚から泊まり客が沢山来て大変にぎやかであった。相撲などは観客が多く、取り組みが見えないほどであった。

現在は参詣者が少なくなった。



（保存対策を急ぐ）絵馬

ぼくすいがっこうあと こうじんどうこそだてじ ぞう 墨水学校跡と荒神堂 (子育て地蔵)

所在地 大字 上高柳



墨水学校跡と荒神堂

墨水学校…明治4年(1871)に廃藩置県が実施され、同年7月に文部省が設置された。そして翌5年(1872)8月3日太政官布告として「学制」が公布され、学校が設置されるようになった。明治6年(1873)11月に墨水学校が開設された。これが町内最初の学校で、その分校が岡田・北伊予・松前校区に次々と設置された。

墨水学校跡碑文には「明治6年11月9日当地ノ学区取締役武市英俊ハ上高柳村民ト打謀リ他ノ地区

ニ魁ケテ此地ニ墨水小学校ヲ開設セリ以来村井俊明先生・相原賢先生相次イデ教育ニ携ワリ校舎ノ設備教育ノ内容共ニ充実シ幾多ノ俊英ヲ世ニ送り社会発展ニ多大ノ貢献ヲナセリ因ツテ往時ヲ偲ビ碑ヲ建テ先人ノ高邁ナル精神ト功績ヲ勒シ永ク世ニ伝エントスルモノナリ 昭和54年9月吉日 重川家俊先生撰文」とある。

子育て地蔵尊…墨水学校跡碑の東隣りに荒神堂(五松庵の記事参照)がある。その中に、子育て地蔵尊が祀られている。地蔵庵は元隅田川のほとり、現在の上高柳上屋敷184番地にあった。耕地整理の時、〔明治43年(1910)～大正3年(1914)〕に廃庵となり、子育て地蔵は旧集会所(現在地)に安置された。

なぜ、子育て地蔵と尊称するのか不明であったが、昭和63年(1988)の大修理の時、解体したご尊体の中に入っていた戒名(真月映照信女)より推察して、施主が若くして愛児を遺して逝った妻の供養と子供の健やかな成長を願って、名のある仏師に作成をたのみ、仏師が心魂をこめて彫った仏像と思われ、哀愁のロマンを秘めたお顔、優しさをもつ尊像は、名作と言わざるを得ない。古老の話によると「隅田川(別名泉川)で、子供が一人で泳いでいると、いつの間にか二人に見えた。これは子育て地蔵さんが子供一人では危いと思われて、一緒に泳いでいてくれたのだろう。子供は泳ぎ終わると一人で帰っていた。」とのことである。



子育て地蔵尊

ごしょう あんあと 五松 庵跡

所在地 大字 上高柳

岡
田



五松庵跡

上高柳老人憩の家の前に、「五松庵跡」と刻まれた小さな石碑が建てられている。

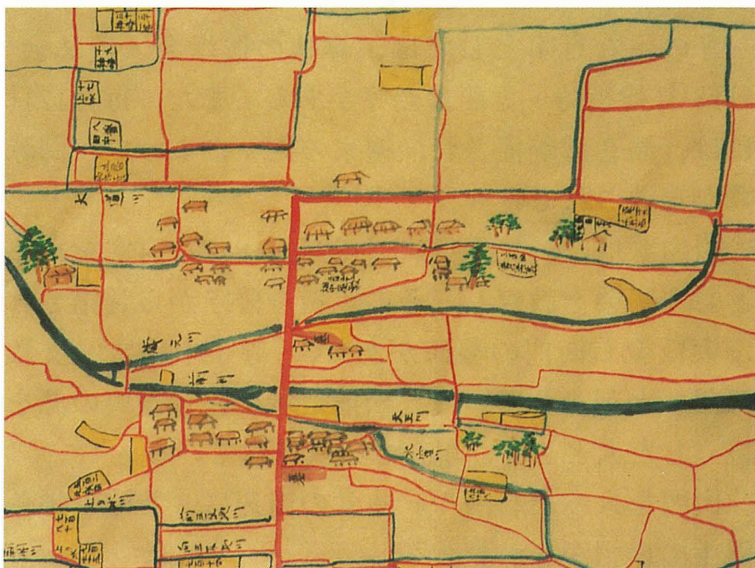
ここには、慶長16年(1611)荒神庵が建てられたといわれている。

荒神は、三宝荒神の略称で、仏・法・僧の守護神である。三面六臂(三つの顔六つの手)を持ち、忿怒の相をしている。不浄を嫌うことから「かまどの神」ともいわれ、「だいどころの神」、「農業全般の神」となってほとんどの家に祀られていた。

荒神庵の庭に、老松が5本天高くそびえていたので「五松庵」と

もよばれていた。ここで近在の子弟は、読み・書き・そろばんを習った。初代師匠は武知五友、ついで村井俊明がその後をうけた。俊明は年若く、才深く、温容で、かつ威厳を備えていたので、子弟からも村民からも尊敬されていたが、墨水小学校が建てられたので、この地を去り、松山中学校の教師となった。この通称「五松庵」といわれた上高柳荒神庵は、もとは大間教深寺持ちの庵で、間口約6.4m、奥行約3.6m、境内、庵田併せて約1反6畝(約1,600m²)を有する庵であった。

耕地整理のときに荒神庵はこわされ、荒神様は、上高柳集会所に子育て地蔵とともに祀られていた。昭和52年(1977)上高柳集会所を他の場所に新築し、旧集会所はとりこわし、その跡に、荒神庵と地蔵庵を合祀した荒神堂を新築して、双方を祀っている。



往時の五松庵付近図(右上の松の附近)

きょうしんじ 教深寺

所在地 大字 大間



教深寺本堂

真言宗^{ぶさんは}豊山派^{はせでら} 奈良県長谷寺の末寺で、本尊は、薬師如来^{やくしによらい}である。

開基^{かいき}や由緒については、不明であるが、一説には、文亀2年（1502）金蓮寺7末寺の一つとして創建されたといわれている。また、延宝7年（1679）仁良和尚の開山^{ばんきろく}とも、当寺に伝わる「萬記録」によれば、享保10年（1725）開基とも記録されている。「萬記録」・「寺院判鑑^{はんがん}」等によると最近まで、石手寺末寺であったことがわかる。

境内にある宝篋印塔^{ほうきょういんとう}は、享保14年（1729）の建立で、昭和59年（1984）の改修中、多くの「一字一石」を出土している。本堂は、平成8年（1997）改築した。

寺の主な行事としては、春秋の彼岸会・灌仏会・施餓鬼会・大般若会（2月3日）^{ひまちきとう}・日待祈祷^{うらぼんえ}・盂蘭盆会等がある。また、毎月17日には、観音講が催され、檀家の人々によって、御詠歌が奉納されている。

境内墓地に、文化年間（1804～1817）自宅を家塾として子弟を教育し、その実績を藩庁から賞揚された大政金右衛門の墓碑があり、「寺子中建之 文政三年」と刻まれている。松前地域の教育振興の源を確立した人として、現在も崇敬^{すうけい}されている。

山門を入った右手や、本堂の周辺に、昔時の神仏混淆の様相^{こんぶ}がうかがえる。



金比羅大権現（神仏混淆の名残）

くみじ

岡大 宇大 駒宮南
龍五 龍新 保 登

所在地 大字 大間

岡
田



昔は川舟が行き交った隅田川

大間の中央部を流れる隅田川は、すみだ がわ 泉川とも呼ばれる地下水の自噴する清流である。重信川の伏流水が各地に泉をつくり、豊かな小川の流水となり、流れは絶えない。川沿いの低地は稲作しかできない一毛田であった。

川そうじは、豊富な流れを速やかに下流へ導くため、必要な河川の維持管理作業である。

豊かな流れは豊富な淡水生物を養い、モクズガニやウナギ、ナマズを購入する必要はなかった。捕獲して商品として販売するか、自家消費する生物でもあった。

しかし、現在では水量、水辺環境の変化に伴って、水生生物の生活状態は激変した。

清流は淡水生物を養うとともに、洗面、ようはい 遙拝、炊事や洗濯の水源であった。各家庭に面した小川には「くみじ」が設けられていた。共同利用もできるように、石垣を組み花こう岩の石段が設けられ、「くみじ」と呼んでいる。

子ども達が身近に接する水辺は「くみじ」であった。

町内の所々にあった「くみじ」は次々姿を消しつつあり、一部が大間の泉川・長尾谷川すじに残っているにすぎない。

生活の中に親水環境があり、広く活用されていたのが「くみじ」である。



「くみじ」での洗い

そがじんじゃ 素鷲神社

所在地 大字 大間



素鷲神社拝殿

主祭神は建速須佐之男命、配神は足那豆智命・手那豆智命である。

境内社には火防明神社がある。例祭は5月3日である。

本殿は流造鉄板葺(3.3m²)で、神紋は木瓜、崇敬者約100戸である。江戸時代には祇園午頭天王社と称した。

正平年間(1346～

1370)に河野家より社領の寄進があり、その後、毎年代官をさし遣わして幣帛を供進し、早魃には代官を参籠させ、祈雨祭を行い、伊予郡全般に神札を配布したといわれる。また、防火の神として崇敬された。明治10年(1877)素鷲神社と改称し、現在に至っている。

大間は、応永年間(1394～1427)大魔と書かれていたことがあったらしい。夜、怪物が現われ、人をさらったりし、また夜ごと火災が起こったりした。

ある夜、地主郷田某の枕もとにその怪物が現れて「祠を建て(天王社・火防の神)六斎日(8日・14日・15日・23日・29日・30日)に、あずき飯1斗(18ℓ)を炊き、真夜中に我を祀れ」と告げ去った。郷田某は早速いわれたようにした。そうしたところ怪事はやんだという。

また、谷上山のお使いの大猪を殺した結果、不審な大火が毎日のように起こった。大猪のたたりだとして、六斎日にあずき飯を献じて祀ったともいわれ、素鷲社では鈴神楽を奉納して祭りを行っていたという。

これらのことから、火防明神社とのかかわりがうかがえる。

社叢の占有木であるホルトノキ(ヒチジョウ)の枯死が進行しており、当社の北東にある2本が平成3年(1991)枯死伐採された。

平成7年(1995)中殿、拝殿を改築した。



風格のある神名石

たかおし ひ め じんじゃ
高忍日売神社

所在地 大字 徳丸（宮浦）



箒の神伝承の高忍日売神社

主祭神は高忍日売神、配神は天忍人命・天忍日女命・天忍男命である。境内社には素鷲神社・金比羅宮・天満宮・太神宮・若宮八幡宮・七生稲荷神社・奈良原神社・生目八幡宮がある。境外末社として中川原の素鷲神社、大間の素鷲神社とがある。

高忍日売神社は、産婆・乳母の祖神としてあがめられ、妊婦の信仰が厚い。また、箒の神ともいわれ、この神を祀る社は全国一社といわれる。

創立年代は未詳であるが、平安時代に延喜式内社に列せられ、延喜式神名帳に載せられた。本殿は流造銅板葺（19.8m²）で、社宝に古文書・棟札・神楽面などがある。

嘉永3年（1850）に上棟された松山城
天守閣の丑木は、境内の松の巨木を用いたものである。社叢はクスノキをはじめ大木が繁茂している。先年、社叢の占有木県指定天然記念物のホルトノキ（ヒチジョウ）の巨木が枯れた。（平成7年（1995）指定を解除された。）

安政5年（1858）に再建された拝殿には「四季農耕図」をはじめ、絵馬額の傑作が多数奉納されている。



高忍日売神社絵馬

ほんしょうじ 本性寺

所在地 大字 徳丸



改築された山門

真言宗豊山派に属し、奈良
県長谷寺の末寺で本尊は薬師
如来である。

山号は玉林山・瑠璃光院
と称し、開基は徳丸の木
下某宅の裏庭の井戸より堀
り出された仏像を尊崇し、正
保元年（1644）久米郡朝生田
村の善宝寺末寺として堂塔が
建立されたと「寺院判鑑」に
記載されている。

また、慶安4年（1651）

高忍日売神社の別当となり、以来寺運は隆盛に向かったが、元禄年間（1688～1703）火災により、堂宇・諸記録を全焼した。享保4年（1719）本性寺に閑居中の善宝寺の住職宥勢によって、時の代官野瀬儀太夫・庄屋安永九兵衛らの協力のもと薬師堂が再建された。明治12年（1879）本堂が建立され、同32年（1899）に大黒完心住職が就任した。現在の本堂・山門は平成3年（1991）11月に再建されたものである。境内には、平成8年に加藤精神大僧正の銅像が建立された。

寺の主な行事としては仁王会・春秋の彼岸会・御薬師講・また、「秋の彼岸は親知らず」といわれるところから、9月23日（彼岸中日）に大施餓鬼法要が盛大に行われている。

山門を入ると右手に子育て地蔵が祀られており、左手には健康を願う仏足石があり、お四国遍路に行く人がよく訪れるという。また、境内には安政年間（1854～1860）の大地震の終息を祈念して植樹されたと伝えられる胴回りが2m余の樹齢150年という老松が枝を広げていたが、枯死した。山門を入れて左手にある蓮池では、夏に古代蓮（大賀蓮）の花が咲き乱れ、甘いほのかな香りを辺りに漂わせて寺の雰囲気盛り上げている。



境内の古代蓮

そうきん じ 宗金寺

所在地 大字 中川原

北
伊
予



宗金寺本堂（右）と観音堂

真言宗豊山派に属し、総本山は奈良県長谷寺で、本尊は延命地蔵尊である。宗金寺は、もともと朝生田村（現松山市）善宝寺の七末寺の一つであった。宗金寺境内に隣接する真言宗醍醐派の「道光寺」（祈祷寺で檀家はない）と並び、河野家ゆかりの古刹であった。

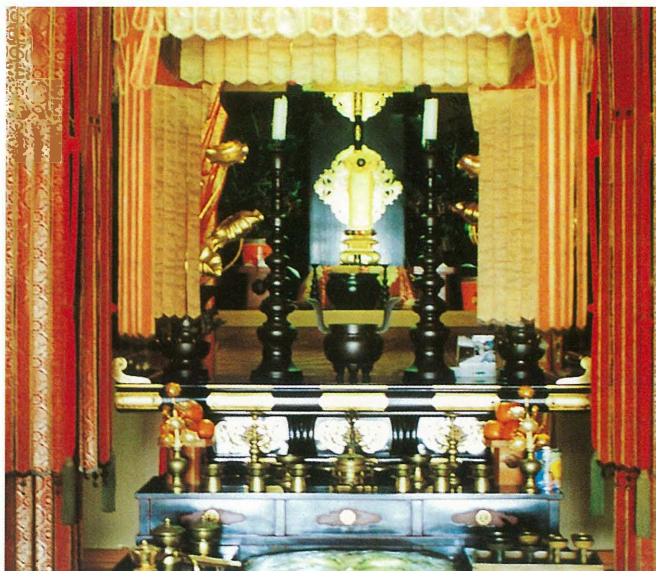
道光寺の開基は寛平4年（892）河野息方といわれている。宗金寺の開基は実須和尚で、萬治元年（1658）という。

明和8年（1771）「寺院判鑑」に次のとおりある。

本寺久米郡浅生田村 善宝寺末
金峯山新龍院 宗金寺

大正14年（1925）、道光寺との合併により、道光寺本尊千手観音は現在の観音堂に安置された。現在の本堂、庫裡は昭和3年（1928）再建された。寺の主な行事としては、仁王会、閏年毎に行う大施餓鬼会がある。

明治初年ごろ、義旭和尚は寺小屋を設けていた。明治5年（1872）小学令によって寺小屋が開新小学校となった後も、引きつづき勤務した。



地蔵菩薩（秘仏）厨子

きっしょうじ 吉祥寺

所在地 大字 出作



元禄の石燈籠

吉祥寺の開基は、天正11年(1583)「尊翁開租」とされている。また、野田石陽著「伊予古蹟志」には「出作に精舎あり、吉祥という。天正中、農夫七郎衛門、夢に恵良廟に遊ぶ、廟のかたわらの椋の梢に光彩をはなち、声ありわれ「空海」なりと、めざめてこれを廟令にかたる。二人共に索求し、大師の像を得、ここに精舎を営む」といわれている。

一説には、天正11年、郡司巡視の時恵依弥二名神社の神木「那木」の木に弘法大師が降臨影向したのを拝し、郡司が村人に草堂をつくり讃向をすすめたともいわれている。本尊は弘法大師像が安置されている。

開基後大火にあったが大師像は難をまぬがれ、今日に至っている。往時は戦国争乱のときであり、民心は安定せず、悪疫流行し、すべて疲労の極に達していたそうである。しかし、大師信仰により平静になり、豊作がつづいたといわれる。

記録によると、元禄年間(1688~1703)に栄え、宝暦年間(1751~1763)には、本堂が再建され、つづいて山門等施設も整備され、近隣にその威容をほこったといわれている。いまなお目引大師として広く親しまれている。

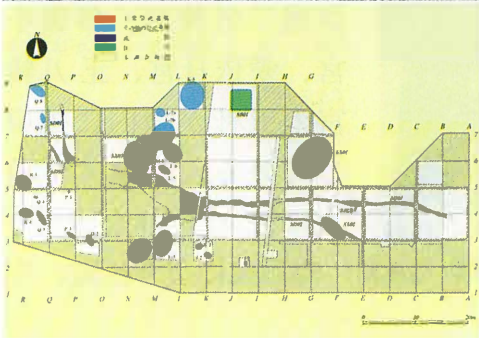
幾多の変遷を経て平成4年(1992)改築されたとき、通夜堂も元のように造られた。境内には那木(椰)の古木、元禄の石燈籠、寛保年間(1741~1743)の手水鉢、大陸伝来の掛仏(秘仏)があり、病氣退散の秘法「キュウリ封じ」の行事も有名である。



掛 仏

しゅっさくいせき 出作遺跡

所在地 大字 出作



出作遺跡の遺構配置図

出作遺跡は、昭和52年（1977）には場整備事業の工事中に発見され、これを契機に推定地域の一部で発掘調査が実施された古墳時代中期（約1,600年前）の西日本を代表する大規模な祭祀遺跡である。

遺跡は、重信川によって形成された沖積平野の標高15m前後の氾濫原に立地している。遺跡の範囲は東西約1.0km南北約0.3kmと東西に長く広い範囲が推定されるが、発掘が実施されたのは、大字出作478-1番地～同481番地周辺約3,000㎡である。

調査の結果、調査区の中央を東西に併走する流路（SD01とSD02）と、流路に囲まれた祭祀遺構（SX01やSX03）や、竪穴住居（SB01）をはじめ多数の焚火跡が発見された。

祭祀遺構SX01は全長9m、幅4mの範囲に須恵器や土師器をはじめ祭祀を特徴づけるミニチュア土器や石製模造品（勾玉・剣形・円板・白玉・未製品）、さらには鉄製の農具や斧のミニチュアのほか、鉄鋌（鉄素材）・屑鉄片などの膨大な遺物が累々と供献されていた。出土遺物の中で注目されるのは、伊予市周辺で焼かれた須恵器が供献されていることと、石製模造品や鉄製品の中に未製品が多く含まれていることである。このことは当時最新の器である須恵器や威信材である鉄器、さらには祭祀の必需品である石製模造品などを近隣で製造した人々が、SX01の造営に深く関与していることを示している。

祭祀遺構SX03は全長3m、幅1.5mとSX01よりやや小規模であるが、完形の土師器が集中的に供献され、その間から少量ながら碧玉製勾玉や石製模造品類と鉄製鋤・鋏が出土した。まとめて出土した土師器は松山平野における土師器研究の好材料である。

出作遺跡の年代は、SX03が5世紀中葉、SX01が5世紀後葉と考えられ、SX03からSX01へとより盛大に祭祀が営まれ続けたと考えられる。

果たしてこのように大規模な祭祀を、いったい誰が何の目的で挙行了たのであろうか。いずれにしても出作遺跡の祭祀はその規模から、単に松前町域に留まらず松山平野全域を対象として挙行された祭祀跡であったと考えられる。

えひめふたなじんじゃ 恵依弥二名神社

所在地 大字 出作



二名神社 拝殿

主祭神^{えひめのみこと}恵日売命は伊予の国^{みたま}御霊の大神であり、伊予の古宮として、往古より伊予二名本宮と称していた。その後、伊予大社五社大明神と称し、本宮伊予神社、伊興^{いよこ}二名神社、伊興小^{いよこ}宮、愛依日宮、正八幡^{しょうはちまん}宮の五社が境内に鎮座している。社地六町四方に及ぶ大社として、

現社地の北方約100mに鎮座されていたが、慶長5年（1600）の兵火により社殿、宝物、楼門等が焼失した。

その後、慶長11年（1606）時の松山城主加藤^{よしあき}嘉明公の命により、五社を一社に合^{ごう}祀し再興され、恵日売命外16柱^{まつ}が祀られている。

元禄のころ、伊予本社正八幡宮、享和年間（1801～1803）には伊予本宮恵依八幡宮、すなわち、八幡様として崇敬されていた。

現存する最古の棟札には寛文3年（1663）恵依弥二名本宮とあり、明治29年（1896）現社名に改称された。また古書によると畳8畳が敷けるような楠が茂り、神興^{くす}が12体^{とぎよ}渡御したとあり、松山城の建築材も同社の大木が使われているという。

境内の西北に宝剣田遺跡があり、明治40年（1907）同地から光がさすので村人が発掘すると石剣、玉、鏡が出土し^{みしるし}御霊として祀られている。

また、境内には平若左近^{ひらわかさこん}（平岡大和守通房入道左近房実^{やまののみちふさのうどうさこんふさね}）等の供養塔がある。

社宝として弥生大型甕が所蔵されている。



石 剣

ぜんしょう けんあん 禅正 軒庵

所在地 大字 神崎



禅正軒庵の山門

禅正軒庵は、神崎71-1番地にあり、本尊は薬師如来である。

昭和初期までは歴代庵主が法灯を継承していたが、現在は晴光院の兼務である。

由緒については明らかではない。明治24年(1891)の寺社調査に対し、(松山)城下法龍寺の弟子実仙の名で回答した文書が「神崎村寺社書類」に残されているが、「禅正軒庵 禅宗、開基年代は分かりませんが、庄屋加藤清兵衛の勤めていたころ寛文元年丑年

(1661)ころの造立と伝えられています。檀家はございません」と回答されている。

もと、この辺りは、山王原といわれ、樹木の生い茂った原野で、現在では全く想像もできない寂しい場所であった。主従ともに討ち死にした平若左近の伝説が残っており、毎年8月12日夕刻に神崎・鶴吉・出作の人々が集まって平若左近主従の霊を供養する大念仏の行事は有名である。(詳しくは、「松前町誌」-民話と伝説(大念仏)-を参照)最近では他地域からも参加があり盛大に行われている。山門のそばには、「大念仏発祥の地」と刻まれた記念碑が建てられている。

また元文3年(1738)庵主沙門義教が濃州(岐阜県)賀茂郡細目村大山寺従4名の霊に法華経三千部を供養したことを記念する「奉読誦妙法蓮華経供養塔」があり、「禅宗瑠璃光山禅正軒」の山号碑が社寺総代によって建立された。



「大念仏発祥の地」の石碑

いよじんじゃ 伊予神社 (五輪塔他：昭和44年 町史跡指定)

所在地 大字 神崎



東向きの伊予神社拝殿

主祭神は彦狭島命、配神は愛比売命・伊予津彦命・伊予津姫命・日本根子彦太瓊命・細姫命・速後神命である。

境内社には山之神社・猿田彦神社・巖島神社・竈神社がある。当社は伊予国の国魂神として古くより鎮座し、延喜式内名

神大社に列せられている。本殿は流造銅板葺(59.4m²)である。

境内北西隅の「入らずの森」に五輪塔がある。明治30年(1897)青銅の経筒6個と、中国宋時代のものと思われる磁器壺2個が掘り出され、社宝となった。五輪塔3基は鎌倉時代のもので、出土品とともに、昭和44年(1969)松前町有形文化財に指定された。

ここは、かつて別当真常寺(現在の晴光院)の一画であったと伝えられている。

拝殿南側には、常に泉のように水のたまるところがあり、霊泉といわれていたが今はかれている。

鶴吉の安井にある稲荷神社は、弘仁15年(824)山城国稲荷山より勧請したもので、伊予神社の飛地境内社である。



入らずの森(経筒出土)の五輪塔



経筒

せいこういん 晴光院

所在地 大字 神崎



平成2年に新築された本堂

晴光院は、大同2年(807)孝霊天皇の第3皇子、伊予親王(神号、彦狭島尊)の後裔、河野(越智)為世公が、伊予親王宮(延喜式内大社「伊予神社」)の別当寺として建立されたものである。

本尊は六道のうち、修羅道を権化する十一面観世音菩薩である。嵯峨天皇の時代より真

常寺という。伊予国守護職である河野氏の尊崇寄進と民衆の厚い信仰により、現伊予神社の西南に広大な寺領をもち、七堂伽藍が完備し塔頭12寺を擁する大寺であった。

時は戦国の時代、しばしば兵火にかかり、更に天正11年(1583)豊臣秀吉の命による小早川隆景の伊予侵攻による河野氏の滅亡により、当寺も衰え現在地に移転した。

慶安元年(1648)松山藩命により曹洞宗寺院として再興され現在にいたっている。非常に格式の高い寺院である。明和4年(1767)3月15日微山和尚の補任状「薄墨の綸旨」にあるように、大本山永平寺住職として補任状が発令され、のち晴光院の住職に赴任する慣習があった。本堂に用いる瓦も菊花紋章入りが常であった。

寺院には「晴光院記」高祖道元禪師著「正法眼藏」の板本が所蔵されており、境内にある六地藏尊は旧寺院跡から発掘されたもので、鎌倉時代の作といわれている。

本堂は、平成2年(1990)新築され、山門と庫裡は、全面改築された。



薄墨の綸旨

はんきょう いし
藩境の石

所在地 大字 鶴吉（三軒屋）



藩境の石（その一）（左上松山藩右下大洲藩）

現在の伊予市上野高瀬と松前町鶴吉三軒屋との境界の路肩に石がある。これが古老から伝え聞いている藩境（大洲藩と松山藩）の標石である。さらにこの標石が境界と路面高を兼ねたものとなっている。

高瀬地区の浸水防止のため、川^{かわ}浚え^{ざら}によって揚げた土砂を近くの「大東^{だいとう}さん」という塚盛^{つかもり}

へ運んでいたのである。しかし、現在は東部上流にJRが通り、水路改修もできたので、昔の浸水の心配はなくなった。

標石の正確な位置は上野高瀬側にある。松前町鶴吉宮前13番地の北東側である。因^{ちなみ}にこの道路西側の水路は、出作の涌水泉からの農業用導水路であった。

昭和2年（1927）電力揚水が開始されたので、取水は廃止となった。この揚水施設は当時この地域では第1号で画期的なものであった。

なお、この周辺に塚盛が3か所あったが、1か所を残し、他は昭和11年（1936）旧北伊予村役場（現松前町東公民館）用地造成のため掘り取られてなくなった。

なお、松山藩、大洲藩の藩境の石（「従是南大洲領」と彫られた石柱）が北黒田にあったが、現在は、伊予市の彩浜館^{さいひんかん}にある。



藩境の石（その二）石の上面より水位を上げられなかった

てんちょうじ 天長寺

所在地 大字 横田



松崎新蔵の墓碑

本尊 しゃかむにぶつ 釈迦牟尼佛 山号 地久山
宗派 曹洞宗
本山 福井県永平寺 横浜総持寺
寛永12年（1635）松山藩主松平定さだ
行入国の頃、遠州（静岡県）掛川よゆき
り松崎家が移住してきた。寛文7年
（1667）政起が横田村初代庄屋となり、
屋敷内に菩提所を建立した。2代目
政澄が拡張し、近くの寺も併せて天
長寺として造立した。（政起を「菩提
所天長寺中興開基禅定門」として尊
崇すうじゆう）

天長寺の親寺は山口県の龍文寺りゅうもんじで
あり、松山の龍穩寺りゅうおんじとは同格の兄弟
寺としてともに栄えていたが、いつ
の頃からか龍穩寺は天長寺をわが子
寺の如く扱い、龍文寺の孫寺の如く
にされ、経済面やその他の面でも常
に二重の負担を強いられた。この無

理な仕打ちに代々庄屋は同格とするよう龍穩寺に掛け合ったが、龍穩寺は松山藩上級武士の墓所でもあり、権勢をかって聞き入れてくれなかった。この屈辱感と経費負担の増大から住民はついに働く意欲を失い、村は次第に落ちぶれる一方であった。7代目庄屋新蔵しんぞうは27歳で庄屋になったが住民からは親のように慕われていた。龍穩寺へ二度も掛け合ったが、駄目であったので、意を決して藩へ直訴し三度目の対決をした。しかし、これも奉行から不首尾を言い渡されたので別室に退くや、かねて覚悟の割腹自害をしたのであった。藩主は驚き山口龍文寺へ調査を依頼したところ、同格である覚書きが届いたので、龍穩寺へも反省を促した。住民は新蔵の義拳ぎきんに感涙し、頌徳碑しょうとくひを建て毎年8月25日法要を営んで、永久にその徳を偲んでいる。



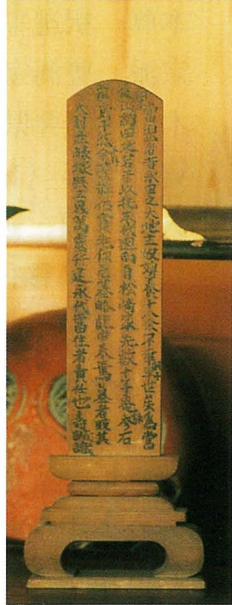
新蔵絵図（部分）

けいぞうあんあと 華蔵庵跡

所在地 大字 永田



庵の由緒
松崎家と庵とのかかわり



平助廉の位牌
平家伝承のもととなる



華蔵庵にある
温和な地藏菩薩

おむかし
往昔、景観美麗な所、小富士松（昭和19年（1944）枯死）の下に広大な精舎があり、地域内の天満宮とともに聖地として尊崇されたが次第に衰微し、堂宇は倒壊して小堂を残すばかりになっていた。

宝永年間（1704～1710）平氏の末裔と称され、十数人を使用する富豪「平助廉」が堂宇を再建して菩提寺とした。後、同家の没落とともに寺院も大破放置

されていた。天明2年（1782）横田村庄屋職を弟の松崎新蔵に譲り、出作村庄屋となった兄の松崎与五左衛門が、法龍寺第8代暁堂和尚の要請を入れて横田村の飛地であった当地に改修再建して、和尚の隠居所とした。「由緒」に「（前略）当華蔵庵及大破造建仕候処法龍寺方丈暁堂和尚御隠居被成度御望ニ付右庵造建之節從……（下略）」（原文）とある。以降第11代大梁和尚まで代々の隠居所となっていた。庵は終戦後に荒廃のため取り除かれ、その跡地に庵の一部分であった地藏堂を建てた。現在の堂は平成元年（1989）に再建されたものである。なくなった山門は旧松前城の城郭の一部だったとの伝承がある。

法龍寺は松山藩主松平家のいわゆる「四か寺」の一つで、寺格も高く触頭を努め、寺領百石を給せられていた。

華蔵庵はそのような理由で権威もあり、堂塔も備わっていた。口碑によると第11代大梁和尚の代に「庵」を「寺」に昇格させることを望み、侍僧に大金を持たせて京都に行かせたところ、不慮の災難により成功せず、現在に至っている。庵内には経文・神像・由緒・平氏位牌等がある。また、第8代暁堂和尚が持参した「釈迦涅槃図」がある。



華蔵庵（地藏堂）

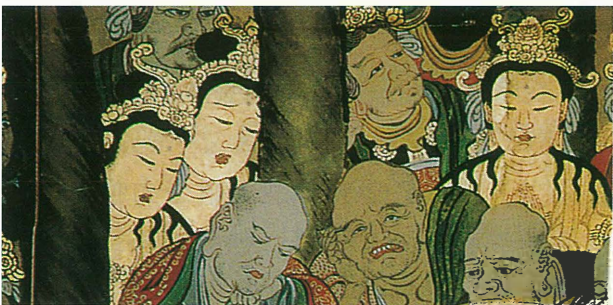
北伊予

しゃかねはんず 釈迦涅槃図

所在地 大字 永田



釈迦涅槃図 (全景)



釈迦涅槃図 (部分拡大)

用いた彩色で、微妙な美しさも魅力といえよう。

この図は、法龍寺第8代暁堂和尚が、華蔵庵に隠居をする際、什器として持参したものである。(くわしくは華蔵庵跡・天長寺参照) さすが、寺領百石の和尚が持参したものは、地方の一小寺院等の持ち物としては分に過ぎたものといえよう。

地域の住民は、この釈迦涅槃図を保持・管理することに誇りを感じ、未来に伝承・継承することを、責務と認識している。

涅槃図は涅槃会（3月15日）の本尊として用いられていた。それは拝まれる聖画ではあるが、尊像画のような本尊的なものとは性格を異にしている。むしろ現象的な釈迦の死をとおして、次元の高い真理を教えようとする教化的な機能に重点をおいているといってもよからう。

図は釈迦の涅槃を扱った説話的な図柄のもので、彩色は明るく、密教画を特色づける幽暗なところは全くない。そこに展開するものは、沙羅双樹の下で、永遠の涅槃にはいつて横たわる釈迦を中心として、仏弟子や在家の信者たちが慟哭し、天空の一方からは釈迦の生母摩耶夫人がはせ参じ、それらの人に混じって、大乘の菩薩が幾人か静かに見守る情景である。

描写の特徴はどの人物も、細いなだらかな美しい線で、的確に描き出され、おおらかで、おだやかで、かつ格調の高い表現になっており、中間色を多く



釈迦涅槃図 (部分拡大)

すがやはんのじょう ぼひ 菅谷半之丞の墓碑

所在地 大字 大溝



菅谷半之丞の墓

原田墓地に、古来赤穂浪士の一人菅谷半之丞の墓碑と信じられ、言伝えられてきた碑がある。歳月に風化されて碑文かいみやう戒名等は判読し得ないが、半之丞の墓石と堅く信じられ語り継がれている。北黒田宗通寺の過去帳に「元禄十六年二月四日 原田半兵衛内 俗名菅谷半之丞まさとし政利 刃氷流剣信士 義士四十七人之内 江戸泉岳寺しかも二而此寺二有」と記されている。

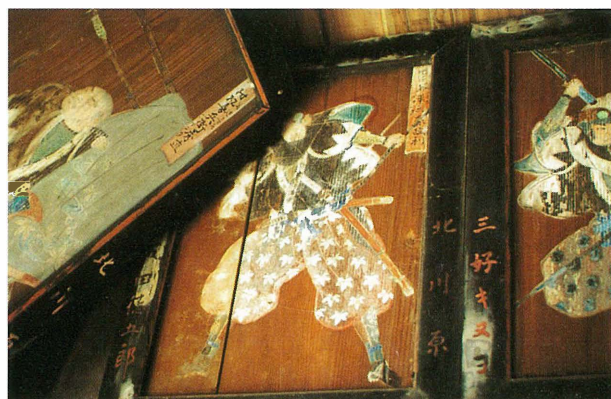
切腹が、元禄16年（1703）2月4日ちからで、大石主税、堀部安兵衛、中村勘助につづいて4番目、介錯かいしゃくは大島半平であった。『泉岳寺本義士銘々伝』によれば「刃氷流剣信士 近習馬廻り知行百石 菅谷半之丞政利行年四十四歳」とあり、また討入り当日は、「裏門三番手として2尺8寸（約93cm）の大太刀すぐやり（直鑓ともいわれる）を振って、不破数右衛門・村松三太夫の

三人組で力戦したと……。」

菅谷半之丞が伊予郡出身者であることは『松山叢談』（第5中）にも記載されている。（永田には土佐の浪人で庄屋宅きぐうに寄寓していたものとの伝承もある）

切腹直前の1月22日、幕命により松山藩主を通じて提出した「親類書」がある。菅谷半之丞が提出した親類書には祖父・祖母・父・母・姉・伯母・甥・姪等の13名を記載しているが、何故か妻子は記載していない。大石内蔵助同様討入り前に離縁したものか。（他の人々には妻子の記載がある）

原田墓地の碑は、縁者の供養碑というべきものであろう。赤穂浪士菅谷半之丞の碑石として永く伝承され、大切に供養されてきた供養碑が松前地区にあることは意味深いことである。



半之丞の絵馬（稲荷神社）町内に2枚あるその一つ

こうしんどう 庚申堂

所在地 大字 大溝



いたみのひどい青面金剛

人の最大の願望は、人命尊重と長寿延命であることは、昔も今も変わりはない。人のいろいろな疾患や苦しみは、人の体内に住むといわれる、三尸虫（三尸九虫）のせいで、この三尸虫が庚申の夜、人が眠ると、体内から抜け出て、天帝に讒訴するというのである。

それ故、「原田」では、廃城になった松前城から石を運び石垣を築き、松・榎（目通約115cm）・藤の植樹を行い、小堂を建てて、青面金剛・三猿を祀った。

庚申の夜には、全員が堂に集まり会食や談話をすることで、眠気を払い夜通し眠らず、三尸虫が体内から抜け出して、天帝に讒訴するのを防いでいたものである。

庚申信仰も時代の波とともに、さびれてきているが、そんな中であって、ここに堂として残され、維持管理を怠らないのは、住民の心の奥に潜む信仰心の厚さではなかろうか。称賛すると同時に、地域共同体意識の崩壊が云々といわれている現今、学ばなければならないものが潜んでいよう。

庚申の徹夜には、時刻が規定されていて、勝手は許されず、厳守されていた。申の七ツから寅の七ツまでの合計七刻の間を不寝として、祭神を祀った。更に供え物の料理も七種、七色の菓子、七種の野菜、七種の供え花……といった具合に、庚申さんは「七」が好きといった伝承は薄らいできている。

現在の堂は、創建三百年祭を記念して、大正5年（1916）に建立されたものである。



庚申堂とエノキ

よ ぐるだいごんげん 四ツ黒大権現

所在地 大字 東古泉



四ツ黒権現堂

京都の公家の息女瀧姫が、侍女三人と阿波へ渡ろうとして、嵐に会い松前の浜へ漂着した。姫らは浜を永住の地と定め、自ら読み書きを教え、魚を行商して数十年生活が続いたが、姫・侍女ら五十余歳を前後に、相ついで病死したという。

浜の人々はその死を哀れみ、東古泉の地に、四つの塚をつくり手厚く葬った。「四つ黒」という小字の地名は、この四つの塚に由来する。江戸中頃の安永年間（1772～1780）に至り、この地に新田を開いた十数戸の人々は、四か所の塚の遺骸を一か所に合葬し、「四ツ黒権現社」を創設して、鎮守社とした。

松前町浜の女性の、戦前までみられた行商姿は、瀧姫のあでやかな行商姿をまねた斬新な服装で、松前ならではの風俗であった。なお、松前の行商する婦女子を「おたた」というが、これはお瀧姫の「おたき」の転訛てんかしものだとされている。（8頁参照）

『四ツ黒大権現勧請奉還記念文』（大念寺蔵）に次のような記録がある。

「（前略）多喜姫ラ四女世寿漸ク盡キテ遺骸ヲ城ノ東南東古泉ハ元稲屋萱田ノ原ニ葬ル。正徳年間（1711～1716）元筒井村百姓市兵衛ナルモノ此原野ヲ開墾シ、安永年間四ヶ所遺骸ヲ合葬シ四ツ黒大権現ト尊メ其ノ鎮守トス。（下略）」



義農神社の瀧姫堂にある瀧姫位牌

時代	西 曆	年 号	町 関 係 事 項	日 本 史 関 係 事 項
弥生 ／ 古墳時 ／ 飛鳥	A.D 100		・出作町畑で土器を用いて生活 ○有柄式石剣を用いて祭祀	
	500		○出作町畑で農耕祭祀（出作遺跡）	266 倭の女王壺与の使者晋に至る 369 日本軍朝鮮半島 端支配 （任那の成立） 391 日本軍朝鮮出兵 421 倭王の使者中国東晋に至る 430 宋に朝貢 552 仏教伝わる（一説に538） 562 任那の日本府滅ぶ 593～622 聖徳太子の摂政 600 隋に使す 604 憲法十七条を制定 645 大化改新（年号の初め） 672 壬申の乱 694 藤原京に遷都 701 大宝律令 708 和同開珎を作る 710 平城京(奈良)に遷都 712 「古事記」成る
	596	推古 4	・僧恵慈上人不動院を開く	672 壬申の乱 694 藤原京に遷都 701 大宝律令 708 和同開珎を作る 710 平城京(奈良)に遷都 712 「古事記」成る
	707	慶雲 4	○玉生神社三女神を配祀	712 「日本書紀」成る 752 大仏開眼 794 平安京(京都)に遷都 801 坂上田村麻呂蝦夷平定する 806 空海帰朝、真言宗を開く
	712	和銅 5	○貴布祢神社（一の宮）創立	
	716	霊亀 2	・条里制地割が実施	
	728	神亀 5	○高柳大明神造営	
	807	大同 2	○真常寺（晴光院）建立	
	808	〃 3	○性尋寺（金蓮寺）建立	
	824	弘仁 15	○鶴吉の稻荷神社勧請	
平 安 代	860	貞観 2	○高柳大名神勧請 ・八幡神社が勧請	894 遣唐使を停止 939 平将門、藤原純友の乱おこる
	940	天慶 3	○頭王神社建立	
	942	〃 〃	○伊予、高忍日売が神名帳に記載	
	942	〃 5	○朝日天満宮勧請	
	1023	治安 3	○この頃玉王荘は石清水領	1016～27 藤原氏の全盛時 1019 刀伊の賊九州を侵す
	1025	万寿 2	○この頃瀧姫流罪となる	1051 前9年の役（安倍氏） 1083 後3年の役（清原氏） 1126 中尊寺金堂落成 1156 保元の乱 1159 平治の乱 1167 平清盛、太政大臣となる 1175 親鸞、浄土真宗を開く
	1171	承安 元	・この頃、松前郷は筒井・浜・古泉・寺町の4か村であった ○経筒埋納（平安末期）	1185 平氏滅ぶ、守護・地頭を設置 1192 頼朝、鎌倉幕府を開く 1219 源氏滅ぶ、北条氏執権 1221 承久の変
	1185	文治 元	・松前大膳大夫隠遁	
	1194	建久 5	○高忍日売 頼朝の奥書付文書を受ける	
	鎌 倉	1231	寛喜 3	○性尋寺再興
1232		〃 4	・素鷲神社（弁天社） 東古泉	
1306		嘉元 4	○伊予神社五輪塔（鎌倉末） ・神崎出作の地名が文書に初出	
1312		正和 元	・岩鋪天満宮造営	1324 正中の変 1331 元弘の変 1334 建武中興 1335 南北朝分裂 1338 尊氏、 町幕府を開く
北 朝 町	1336	延元 元	○武家方が松前城を攻める	
	1343	興国 4	○高忍日売神社に寄進状	

時代	西 曆	年 号	町 関 係 事 項	日 本 史 関 係 事 項
室 町 時 代	1356	正平 11	○この頃素戔神社建立（大間）	1392 南北朝の合一成る 1397 金閣寺建立 1399 応永の乱 1457 太田道灌、江戸城を築く 1467～77 応仁・文明の大乱 1483 銀閣寺建立 1485 山城国一揆、自治を行う 1495 北条早雲、小田原に拠る 1531 一向一揆、朝倉氏と戦う 1543 ポルトガル人来る 1549 ザビエル、キリスト教伝来 1555 厳島の戦い 1561 川中島の戦い 1575 長篠の戦い 1582 本能寺の変 1582～98 太閤検地 1590 秀吉の全国統一 1592 文禄の役 1597 慶長の役 1600 関ヶ原の戦い 1603 家康江戸幕府を開く 1615 大阪夏の陣 1635 参勤交代制の確立 1637 島原の乱 1639 鎖国 1651 由比正雪の乱 1688～1703 元禄時代 1702 赤穂義士の討入り 1716～35 享保時代 1721 目安箱を設置 1732 享保の飢饉 1743 甘藷栽培を励行 1778 ロシア船、蝦夷地に来る 1792 林子平処罰される 1800 伊能忠敬、蝦夷地を測量 1808 林蔵樺太を探検 1815 杉田玄白「蘭学事始」を著す 1825 外国船打払令 1837 大塩平八郎の乱 1853 ペリー浦賀に来航 1854 日米和親条約 1860 桜田門外の変 1864 四国艦隊下関砲撃 1867 大政奉還・王政復古 1868 明治維新
	1365	〃 20	○河野通堯が松前城を攻める	
	1375	応安 8	○沖神社建立	
	1388	元中 5	・足利義満が松前浦を安国寺に寄進	
	1444	文安 元	・河野教通が松前を忽那氏に譲る	
	1481	文明 11	・松前は荏原平岡氏の支配下へ	
	1490	延徳 2	○この頃の松前城主は栗上氏	
		〃 〃	・河野教通玉生荘の年貢を横領	
	1493	明応 2	○教通性尋寺に禁制を掲げる	
	1502	文亀 2	○教深寺創建	
安土 桃 山 時 代	1557	弘治 3	・幽谷上人松前に生まれる	
	1576	天正 4	○善正寺創建	
	1583	〃 11	○道光寺、吉祥寺創建	
	1594	文禄 3	○長徳寺創建	
	1595	〃 4	○松前城を築造、金蓮寺移転	
	1598	慶長 3	○素戔神社を勧請（中・横・東）	
	1600	〃 5	○二名神社兵火により焼失	
		〃 〃	○如来院（刈屋）の戦い	
	1601	〃 6	○重信川の改修（五松庵）	
	1605	〃 10	○大智院開山	
1606	〃 11	○矢野地蔵を安置し、大施餓鬼		
江 戸 時 代	1631	寛永 8	○宗通寺建立	
	1644	正保 元	○本性寺堂塔建立	
	1645	〃 2	・南江頸分村して岡田・永田	
		〃 〃	○本性寺創建	
	1647	〃 4	○大念寺開基	
	1658	万治 元	○宗金寺開基	
	1661	寛文 元	○この頃禅正軒庵造立か	
	1674	延宝 2	○天長寺創建	
	1703	元禄 16	○赤穂義士ら処刑される	
	1720	享保 5	○華蔵庵は平氏の菩提所	
1732	〃 17	○作兵衛餓死する		
1769	明和 6	○矢野騒動で4人処刑される		
1774	安永 3	○松崎新蔵割腹自殺する		
1777	〃 6	○松山藩作兵衛の碑文を建てる		
	〃 〃	○四ツ黒大権現を祀る		
1804	文化 元	・松前港を改築する		
代	1820	文政 3	○和多都見神社勧請される	
	1822	〃 5	・甘蔗の試作がおこなわれる	
	1831	天保 2	○南村家塾を開く「橙黄園」	
	1854	安政 元	・地震のため開墾地一毛作となる	
	1858	〃 5	・コレラ病流行死亡者多し	
	1860	万延 元	○安政年間華蔵庵再建	
	1864	元治 元	・第1回長州征伐	
	1868	明治 元	・松山藩征討をうける	
		〃 〃	・神仏分離令	

編集委員

文化財保護審議会委員

初 版	改 訂 版	再 改 訂 版
仙 波 文 治 徳 丸	戒 田 光 一 塩 屋	戒 田 光 一 塩 屋
戒 田 光 一 塩 屋	中 村 文 雄 永 田	中 村 文 雄 永 田
上 田 奈保美 昌農内	赤 星 敏 美 筒 井	上 田 常 光 昌農内
大 黒 宜 俊 徳 丸	上 田 奈保美 昌農内	岡 野 哲 北黒田
岡 野 哲 北黒田	岡 野 哲 北黒田	郷 田 光 生 大 間
塩 梅 豊 宗意原	高 市 長 神 崎	友 田 秀 謙 西古泉
中 村 文 雄 永 田	西 村 博 明 出 作	西 村 博 明 出 作
西 村 博 明 出 作	二 宮 和 広 砥部町	早 瀬 辰 郎 東古泉
平 井 屯 昌農内	早 瀬 辰 郎 東古泉	平 井 屯 昌農内
古 川 成 志 筒 井	平 井 屯 昌農内	山 口 稻 男 神 崎

文化財 あんない

平成5年3月 初版
平成7年10月 改訂版
平成12年3月 再改訂版

題字 戒 田 光 一

発行 松前町教育委員会

編集 松前町文化財保護審議会

